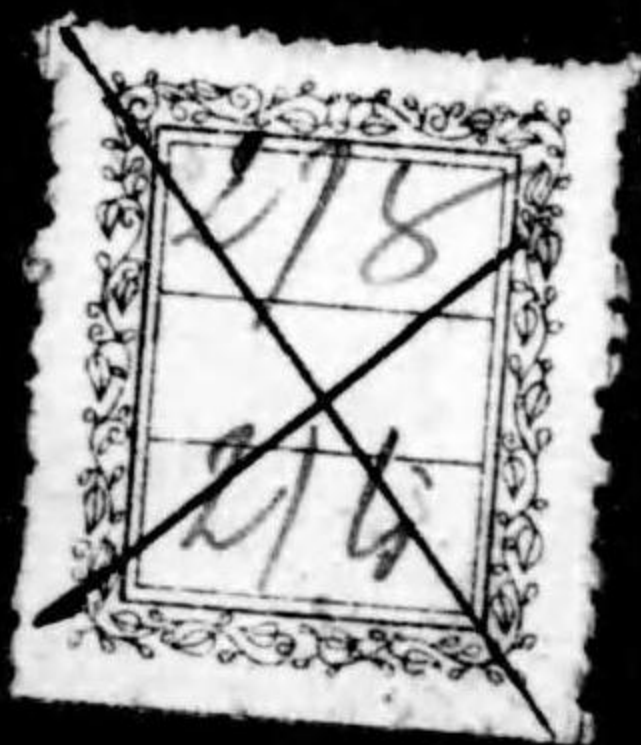


近松翁の  
洗心録



特



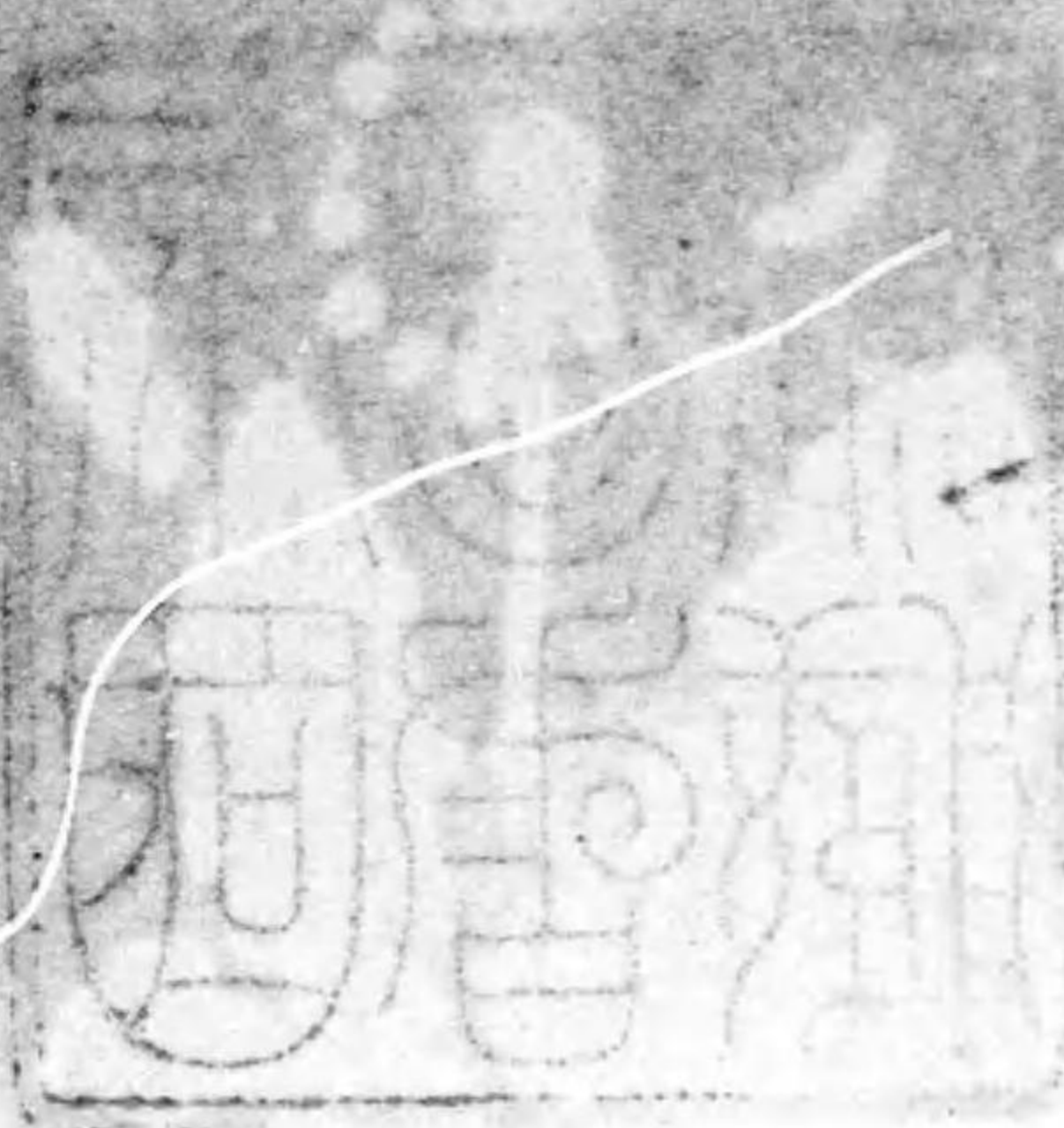
始



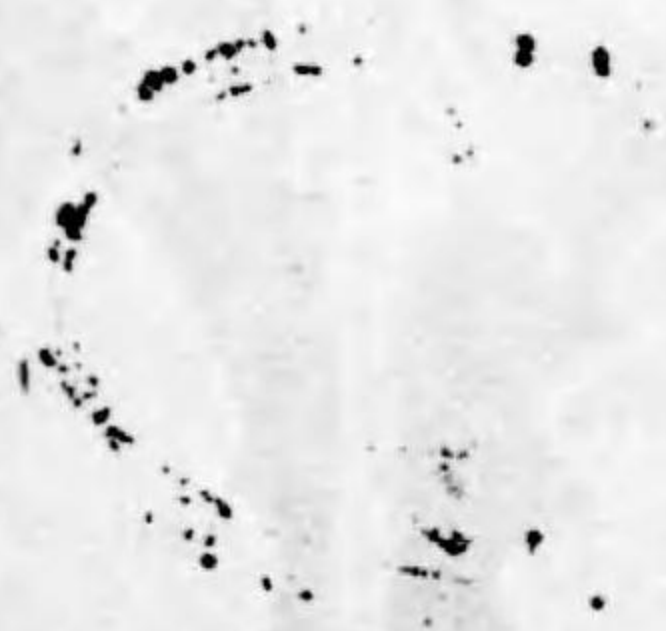


持100  
343

洗  
心  
錄



大正  
4. 4. 21  
内交



■本書の表題は著者の直筆なり

### 名著梗概及評論刊行趣旨

世間には賣行きの善き書物あり。賣行きは悪しけれども價値の多き書物もあり。廣く讀まるゝ書物、並に廣く讀まれねばならぬ書物を撰びて先づ其梗概を説き更に其内容を評論し、其長所と短所とを明かにし、讀者界の火柱たらんとするは本書刊行の目的なり。而して其評論の爲に筆を執る人々は孰れも當代知名の文士にして識見、學殖少くとも著者と相等しきものならざるはなし。評論とは價値を定むることなり。本書一たび出でゝ思想界始めて群書の價値を解し、些か帝國興國の氣運に貢獻するを得ん歟。本書の向つて進まんとする理想は此の如し。

大正三年十二月

編者識

## 序

明治文學史を繙くものは、先づ誰でも尾崎紅葉と相拮抗して覇を唱へた幸田露伴博士の事業と功蹟に注視するであらう。實に自然主義の勃興以前に於ては紅葉の諸作と共に博士の「五重塔」や「風流佛」や、如何に赫々として驚異と崇敬とを聚め、當時のわが文壇の一大權威として仰がれたことであるか！

寔に時代の推移は怖ろしく奇怪にして、また皮肉にも、わが幸田露伴氏は博士といふ肩書を獲得すると共に、現代及び將來の文壇に於て、文藝史家以外には絶対に永遠に文學者乃至作家としての存在は忘られて居る。博

士は文壇に於ては既に葬られた形骸に過ぎない。

同時に現代に於ける博士は、一個の犯すべからざる社會教育者として一大權威をなしてゐることを忘れてはならない。その近著「努力論」や「洗心録」を讀んで今の博士の生活と思想を窺ひ博士の絶對の存在を知ることがまた有意義なことであると思ふ。

大正四年四月

著者誌す

目次

緒言……………一

博士の隨感隨訓……………五

洗心録の社會教育……………一六五

目次終

# 洗心録

稻毛詛風著

## 緒言

洗心録は幸田露伴博士の隨時隨興の感想の斷片と記行文及び研究等を集録したものである。

博學多識よく世情に精通し、多方面に亘る其趣味の赴く處到らざるなく、眞劍なる研究の周到に飽くまでも徹底したる、誠に博士の眞面目が躍如として現はれてゐる。

而して文章は、現代語によらずに、古文體を以て、博士一流の典雅清楚を極め、猶到る處、豊富なる機智とユーモアに充ち満ちてゐるので、それが太い牽引力となつて、思はず知らず讀過させるといふ近來の快著である。その感想録に於ては、多くの巧妙で面白い比喻例證を擧げて、廣く世に訓へやうとしてゐる。

然し、博士は哲學者宗教家の大哲理、宇宙觀、人生觀を眞向に振りかざしてはゐない。

あらゆる辛酸をなめ盡し、全く世故に長け、世情を見通したといふ質朴な好老爺の世間に對する、丁寧親切に、又穩健であつて元氣な忠言といふ風である。

要するにこの書は、ある特別な専門的の智識階級に讀ませるよりも、廣く世間一般に讀ませやうとしてゐるので、寧ろ、語弊があるかも知れぬが手取り早くいへば俗世間對手であると云ひ得る。而して、やがて此點に於て此書の價值が完璧をなすのである。

故に、此書に、専門的な哲理乃至人生觀を要求するのは無理な註文であつて、又さういふ種類の人々が、車夫が東京見物の田舎者を九段の招魂社前に牽いて、大村益次郎の銅像を指して、

『あれは、大村益次郎といつて、天皇陛下に忠義を盡した人である。』といふ説明に不満を持つと同じやうな不満を感じるかも知れぬが、その説明の當事者には、それで充分に完全な價を持つてゐる。勿論、説明者もそれで



立派であつて、被説明者も亦、完全な理解と、満足を得なければならぬ。然し、此書の平易な穏かな教訓の陰には、博士の社會觀乃至人生觀が太い伏線をなしてゐることはいふまでもない。

如上の意味によつて、此書は廣く社會一般に金玉の價値を有してゐる。廣く社會一般に讀むべき本である。

さうい意味に於て、全く得難き有難い著書である。殊に、現時の不眞面目な、金のためにペンが齎らした禍の結晶といはるべき著書、乃至生嚙りの思想が生んだ珍奇な著述、新奇を衒ふためのみの失敬極まる著述の瀰漫する讀書界に於ては、かゝる禍を平氣で受けてゐる讀書家には、此書の如きは全く貴いものといはねばならない。

しかし乍ら、此書は、一定のペーヂを充すためにのみ焦慮した結果、餘りに多くのものを集め過ぎた感がある。その爲めに一貫した氣分が壊される恨みが十分にある。尤も、これは著者の罪でなくて當然本屋の罪であるかもしれない。

以下、章を遂ふて、讀後の感想を加へ、最後に、此書に現はれた博士について一言を述べて以て終を結ばふと思ふ。

### 博士の隨感隨訓

□樂地。如何なるところにも樂しきところは有るべし、又如何なるところにも樂しからぬところ有るべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水ゆる

やかに流るゝ春の日に當りても、心よき事のみ懐に満つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒に怯ゆることも有る例なり。——春の日雪雲の目を障へて暗く、大地凍りて土に生色無く、人畜共に萎え屈む冬の時に當りても、うら悲しき事のみ胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣をおぼえ、木の根焚く山家の爐のほとりに罪無き話の興を湧かし、ぬく灰はたく煨芋のあたゝかさに笑むをかしさも有るべし。金殿玉樓にも樂しからぬ折は有るべく、茅店草屋にも樂しき處は有るべし。——冬の日——弓弦は直く弓は曲れり。此の言葉、まことに戻く可きにあらず。されど曲れる弓も直なるところあればこそ箭を放つて中るなれ。ひらありては弓の用替る。これ

曲れる弓に直なるところあるなり。直なる弦にも曲れるところ無きにはあらず。麻の織緯を詳しく視れば必ずや振り廻られて、さて其の強さを保ち居るにあらずや。これ直なる弦にも曲れるところは有るなり。——弓の直、弦の曲——樂しきところにも樂しからぬところの有り、樂しからぬところにも樂しきところ有りといふも、おほよそ此の如し。諦觀の工夫足らざる時は、事物をたゞ一向にのみ思ひ做すものなれども、事物にたゞ一向なるは少し。好きが中にも悪きが錯り、苦しきが底にも樂しきが潜めるものなり。——事物に一向なるは少し——

此世は我一人のために設けとゝのへられたるものにあらず、されば親として吾が子をも飽かず思ふことあり、子としては吾が親をも物足らず思

ふことあり、人を使ひては齒痒くもどかしくおもひ、人に使はれては腹だしく不満不快におもふことあるも、免れ難き世の習なり。まして身貧しく、學乏しく、よろづ心に任せぬ者などに在りては、いつも口惜く、あぢき無く樂しからずおもひて、我が如き苦しき目をのみ見て、生命ながらふる者も有らじなど、身をも棄て果てむほどにまで、或は恨み、或は瞋り、或は憂ひ悲しむことも、おのづから有る可し。されど其の人より言へば、窮苦の底の底に沈みて右へも左へも行くべき道だに無きやうなるも、他の人より言へば、如此如此したらんには宜かるべきものをおもひ、或はまた少しは樂しきかたも無きには有らざるやう思ひ做さるゝも有るべし、——世と我と——事物はおほよそただ一向ならぬものなれば、いとく樂

しからぬが中にも、樂しきところ、樂しむべきところも有るべければなり。  
——苦中の樂——  
樂しきところ、樂しむべきところを見出し得れば、如何ほど窮苦不快の中に在りても、人はおのづから勇氣を得て、苦中の苦に堪へ忍び、やがて人上の人となり得ることも有るべし。さ無きまでも人若し常に樂しからぬが中に樂しき地を見出さんことを心がけて、其習慣を我が身につく時は、朝夕に心も潤く氣もゆたかになりて、おのづから人品も宜くなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過ごすやうになるべし。樂地を見出すべし。努めて樂地を見出すべし、努めて樂地を見出すの習慣を身に賦せんと心がくべし。——樂地を見出すの習——

むかし或江州の行商人と他の國の行商人と共に碓氷の坂路を登り行きける折、夏の日の烘るが如く熱きに、商人の品の嵩實に重かりければ、二人とも憊れ苦しみて憇ひけるが、苦しみの餘りに江州のならぬ商人、碓氷の山の今少し低くあれかし、身すぎの道に苦しからぬは無けれど、かばかり高く峻しくは、行商を廢めて歸り去らんとしも思ふなり、と溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、卿の苦しむ程は我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ汗も流るゝなり、されども我は然おもはず、此の碓氷の山を十ほど重ねたる高さ山もあれかし、さらば數多き行商人は皆半途より身も憊れ心も弱りて歸り去るべし。其時我一人如何にもして山の彼方に到り、思ふがまゝに商買して見んとは思ふなり、碓

氷の山の高からぬこそ口惜けれと云ひしとなり。——碓氷峠の話——同じ苦艱の中に在りても、よく樂地を觀るものは、身撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀、よく思ひ味はふべきなり。

□苦境。雲を瞻れば雲は悠々として行き、水を觀れば水は洋々として流る。草は茸々として生ひ、樹は轟々として立つ、天地の間の物、皆やすらかに其の性を遂ぐるに似て、ひとり此の世の中のみは、不如意の事の常に七八、與に語る可き人三四無きに似たり。——雲の象と水の相と、人の世の中——

されど雲の象を視るに、綿の如くに屯し、帯の如くにたなびけるのみにはあらで、或は下豊にして上殺げ、或は上整ひて下亂れ、或は斧劈を被れるが如く、或る刀截に遭へるが如くなるも少からず。これ皆風に揉まれて是

の如くなるを致せるなるべし。水の相を考ふるに、練絹を曳けるが如くに易く注ぎ、箒を買けるが如くに直に走るは稀にして、或は巖の塞がれて屈まり、或は山に會ひて縈り、或は遏められて滞り、或は扼せられて激し、東に曲り西に折れて、漸くにして海に至る。これ皆地に制せられて然らざるを得ずして而して然るなるべし。草の萌ゆる、樹の育つ、其の初は必らず勾曲して土を抽く、屈せずして出づるは殆ど無し。これ亦容易平安には日の恵にあひ、露の恩に霑はざるなり。雲水草樹猶是の如し。よろづの物、苦境を経ざるは絶えて無しといふ可し。——萬物苦境を経ざるは無し——智慧拔群ならば苦を排し樂を得べしと思ふは、思ふこと淺きなり。智ある人には智ある人の苦あること、たとへば碁の道に深く造れる人も、又一

勝一敗す、其敗るゝの時は苦慮を免れざるが如し。——碁聖も苦しむ時あり——勇力絶倫ならば、苦を抜き樂を致すべしとおもふも、思ふこと至らざるなり。力ある人も心に任するのみにはあらぬこと、たとへば力士の優れたるものも、また一生勝ち遂ぐべくはあらず、其負くるの日は苦戦を免れざるが如し。——力士も苦む日あり——富みて且つ貴く、威ありて權ありとも、其の人常に樂地にありて苦境に居ること無かるべしと思ふは、甚しくあやまれり。富者には富者の苦境あり、貴者には貴者の苦境あり、威權あるものには威權あるもの、苦境あり。柱大なれば梁もまた大にして、受くる力の少からざるが如し。——柱大なれば梁も亦大なり——南面の樂といふ語はあれど、帝王と雖も苦境無き能ず。明君英主は夜深うして寝ね、

曉夙あかつきく起き、禮れいに徇したがひて身を克こくし、義ぎを取り欲すを捨て、夢ゆめにも國たの爲ため民たのためと祈いのり求もとむるの意いを遺いれぬやうにし玉たまふものなり。天あまを樂たのしむといふことあれど、聖賢せいけんと雖なも苦境くきやう無なき能よはず。古いにしより聖賢せいけんの、歎息たんそく、悱惻ひそくの言こと多おほきをもて知るべし。——明君めいきんも苦くる、聖賢せいけんも苦くるあり——まして豪傑かうけつしゆんる俊偉しゆんるの士しの如ごときは、魚いの味あじの美うなるもの、釣つられ、禽とりの肉にくの旨あじきもの、羅らさるゝが如ごとく、世よの大任たいにんを負おひ、邦はの公益こういを圖はかざるを得えざるより、樂地らくちに居ゐる事ことは少すくく、苦境くきやうに立たつことは多おほく、艱難くわんなん困厄こんやくの間まに一生いっしやうを終おはるは、いつの代よ、いづれの國くにに於おても然しかり。——豪傑かうけつしゆんる俊偉しゆんるの士しの苦くる——凡常ぼんじやうの人ひとは、實じつに苦境くきやうといふほどの苦境くきやうに立たつことも無なくて終おるものなれども、材小さいせうなれば堪たふる力ちからも乏ひしきまゝ、苦境くきやうに沈しづめりと思おもひ惱なむこと多おほし。とてもかく

ても苦境くきやうの存ぞんすることを免まれぬは人の世よなり。

苦境くきやうは種々しゆしゆなり。されど其そのの最もも身みに近ちかきより之これを言いへば、食しょくの吾われが意いに任せぬこと、これ第一だいいちなり。衣服住居いふくぢゆうきよの吾われが意いに任せぬは此こゝに比くらぶれば猶なほ忍しのぶべし。身みの暇ひまの吾われが意いに任せぬこと、これ第二だいになり。吾われが身みに暇ひま無なくて我が爲ためさんとすることを爲なす能よはざるは、食事しょくじの吾われが意いに任せぬの苦くるにも劣せる可べからず。身みの力ちからの吾われが意いに任せぬこと、これ第三だいになり。或あるは病びやうみ或あるは弱じやくくて我が心こゝろは有ありながら、吾われが身みの堪たへざる、これも身みの暇ひまなきの苦くるにも劣せるべからず。寒ふくして衣服いふくの心こゝろに任せぬ、風雨冷熱ふううれいねつに住居ぢゆうの心こゝろに任せぬ、これも苦くるしといふべし。其そのの最もも心こゝろに切きなるより之これを言いへば、自みづから信しんずるところ無なき、これ第一だいいちなるべし。吾われが思おもふことことの意いに任せぬこ

と、これ第二なるべし。吾が才徳力量學術の足らざること、これ第三なるべし。人に誤り解せられて、無實の責を負ひ、咎を被りたるこれも苦しといふべし。——苦のさまざま——

さりながら、人の世に在るや、肩あれば衣ざることなく、口あれば食はざること無しと云へり。粗糲といへども一鉢の飯あり、寒冷といへども一盃の水あらば、則ち活くに堪ふ。最も身に近き苦も、さばかりは人を苦しめぬものなり。男兒の身に肉を包み、肉に骨を有する、自から信ずる處なくしてはあるべからず。苟も自から信ずる處あるや、最も心に近き苦は無きなり。心身に緊切親近するの苦にして此無きや、何の眉を蹙め神を傷ましむることかこれ有らんや。身に近き苦と心に近き苦と共に排す可し——

語に曰く苦中の苦を喫せずば、人上の人と爲り難しと。苦境に立つをば甘なふべきなり。苦境を避けて走らんとはなすべからざるなり。

古の人を學ぶに、古の人の功を成し意を遂げたるの形跡を見て之を學ばんとする勿れ。汲むことを善くするとも、古き河にも古き水は流れぬなり。古の人を學ぶに、古の人の苦に堪へ心を鍊りたるの眞處を看て之を學ぶべし。磨ぐ術を悟りぬれば、刀の刃は刀の利味を出すものなり。刀の研にあふは、刀に取りては吾が身の瘦するほどの苦境なり。干將莫邪も剛に遇はずんば吹毛を斷ずるに至らず、英才大器も苦境に立たずんば有用の人たる能はず。歡んで苦境を迎ふべきかな。——歡んで苦境を迎ふべし——

先づ博士は、卷頭に於て、人間生活の苦と樂とを説き、詳に世態各方面

の比喩を巧みに引證し來つて、それに對して取るべき覺悟と方法とを示してゐる。誠に平易に、誠に通俗的に、穩かに世人に訓へられてあることは有難いことである。

但し、吾々から見れば、餘りに抽象的な、非科學的な説法だといふ不満は十分にある。其例證、論法共に吾々の實生活とは没交渉に過ぎて、密接に觸れない所に物足りなさはある。元來、人間の苦や樂といふことは、甚だ主觀的なものであつて、傍人が、直ちに、それに對して幸、不幸を斷じ得べきものではない。其個人個人の内生活に深く喰ひ入つて始めて判斷を下すべきものがあるが故に、希くば、吾々の生活にまで、緊接に觸るゝ程の、根本問題に及んで欲しかつた。

世間は世間である。俗世間は俗世間とあるかも知れないけれども、博士の筆法を借りていへば、『古き河にも古き水は流れぬなり。』現代の人間は一般に、もつともつと常に根本問題を要望するものである。

□内證。此章に於ては、個性の貴ぶべきことを説いてある。生の建設といふも、生の創造といふも、吾自らの生活なるが故に、先づ各々の個性が本源であらねばならない。曰く、

師は其の弟子に吾が得たるところを傳へんと願はざる者なし。されど人おのゝ異なりて、才それゝに差あれば、弟子の能く師の如くなるものは、世に幾許もなし。これ天の人に與ふるところ、必ずしも同じからざるに本づくことなればあやしむべくも憾むべくも無きことあり。弟子もし、



ことごとしく師に等しからば、其師既に世に出でたる上は、其弟子世に無きもよろしく、其弟子猶世に存せん限りは、其師は有りてかひなきものとなるべし。弟子は師に異なり、師は弟子と同じき能はざるところのものありてこそ、師は師として尊く、弟子は弟子として尙ぶべきなれ。さらば萬年は一年の如く、百人は一人の如くにして、世はたゞ山もなく川も無き様のおもしろからぬものとなり、學問も技藝も平板無奇の姿をあらはして、光も色も香も聲も味も、全くおなじきもののみ、常住の威をふるひて、變化も進歩も絶え果てなん。——師と弟子と各々相異なるの妙——(中略)

師は傳へんと欲して傳ふる能はざるものあるなり、弟子は受けんと願ひて受くる能はざるものあるなり。世に不傳の妙といふ言葉あり。まことに

何の道にせよ、言語も之を談る能はず、動作も之を示すこと難きことあり、易牙は古の普く調味するものなり、されど羹の味を談る能はず、韓娥は古の善く唱歌するものなり、されど音の色はこれを示すこと難し。傳へんとするもの傳へんことを欲せざること無く、受けんとする者受けんことを願はざるにあらざるも、易牙の舌の宜しとするところを、易牙の舌を有たぬ其弟子には感ぜしむべくもあらず、韓娥の喉の可とするところを韓娥の喉を有たぬ其弟子には教ふべくもあらず。——不傳の妙——不傳の妙はそこにありて、極致の境はいづくとも無ければ、要するに、師の内證は師ひとり知るのみ、弟子の自得を待つのはかなし。すべて語るべく示すべきをば粗となし外となし式となす、語るべからず示すべからざるをば密となし

内となし神となす。粗と外と式とは、知り易く得やすし。密と内と神とは知るべからず得べからず。たゞ自得内證して他人の窺ふ可からざるところに至るなり。人より受くるが如くなれども、しかも自ら得るが故に自得といひ、外より學べるが如くなれども、しかも内に證するが故に内證といふ。事理皆自得内證を貴しとす。たゞに學問技藝のみにならず、善を善とし惡を惡とするが如きことも自得内證あつて、はじめてまことに善を善とし惡を惡とし得るなり。人たゞ内證あるをたつとぶ。内證無き間は何事にまれ恃むに足らず信ずるに足らず。知れりといふと雖も實は知らざるにおなじからむ。——自得と内證と——』

要するに、換言すれば、人は各々自分自身のしつかりした生活を築き上

げて、これを堅く把持して行かねばならないといふことである。たゞ、個性といふ大きな問題が、師と弟子といふ狭い小さな材料を吡喩として引用された爲めに、頗る小問題の如くに思はれるのは、かへすくも遺憾である。が併し、世間一般のためには、これが却て解り易くていゝかも知れない。果して然らば、以下續出する平易に面白しる可笑しき處世訓こそ、博士の世に説かんとする態度、方法の巧妙なるを示して驚嘆さするものでなければならぬ。

□急ぐ勿れ。古より急ぐ勿れといふ教あり。何事を爲すにも急ぎては手おちも生ず可く、あやまちも出づべく、然無きも善美精良には至り難かる可ければ、急ぎて事を爲して宜しかるべき所以は無し。急がばまはれといへ

る諺は急ぎて功を貪らんよりは、まことに其の事を疾く做し了せんとおも  
 はゞ、猶且つ急がず忙てずして、正しく大なる路を取りて進むべしといへ  
 るなるべし。會者は忙せずといへる語は、よく事に處し物に接する人は、  
 忙てふためきて心せはしく落つかざるやうのこと無く、如何に餘裕ありて、  
 悠々として迫らずに、其の爲すべきを爲すことをいへるなるべし。まこと  
 に忙て急ぐは、不會者の常態にして、遅きやうには見ゆれども正しく大な  
 る路を取るは却て速かるべきなり。かほどの事は誰も知りたることにて、  
 めづらしくもあらねば、新に言ひ出づべくもあらぬことなるが、さて又實  
 際に當りて、此の急ぐ勿れといふ教を咀嚼玩味すれば、旨きものは味はふ  
 によりて、其の旨さを増すが如く、善き訓はこれを體驗するによりて愈々

其の好きところを知り得るものなり。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

博士の富士登山記に、(前略)おのれは病み上りの身の筋骨も猶ほ緩み萎  
 えたるに、物食ふ力も弱り居ければ、疲勞困憊ほとく堪へざらんとし、  
 頭は氣壓の急變の爲に痛み、心臓は音立てんばかりに鼓うつて行歩も意に  
 任せずなりたり。

されど負けじ心は焦ち躁ぎて、人にも後れじ、疾く八合目の室に到らん  
 とおもふものから、堪え難き脚の重き胸の苦しさに堪へてあせり進むに、  
 剛力諫めて言ふやう、八合目までは猶道のほどあり、急ぎ玉ふ勿れ、急ぎ  
 玉ふ勿れ。一時半時を早く室に着きたりとして何の甲斐あらん、室に着きて

は物食ひて睡るばかりなり。大に疲れ勞れては一時半時を多く睡りたりとて、其の疲勞の癒るべきにはあらず。山へ登るの法、たゞ餘れる力の猶有る間に、少時憩ひ休めば、忽ちにして勞は去り力は湧くものなれば、其の新しき力の有る間を心靜に登り玉へ。我等も決して急ぐこと無し。心の急くと身の勞ると、二つに責められては叶ふ可くもあらず。家の内に在りてさへ、心急げば息亂れて苦しきを、まして力を用ゐて山に登るに、心急きては胸苦しくなりて堪ふ可からず。胸苦しきを強ひて抑へて猶上りつゞくれば、かならず宜しからぬことの出で來るものなり。此の御山に上りて俄に病を得し如くなる人々は、多くは胸苦しくなりても猶強ひて憩はず、ひたすら心させる室に辿り着きて憩はんとて急ぐより思はぬ苦を得るに至

る。身も重くおはし、殊に病後と聞えたまへば、たゞ餘れる力の猶有りて、胸の苦しさをさまで甚たしからぬ間に憩ひつゞて心靜に上り玉へ。胸躍らば直に憩ふやうにし玉へ。夜に入りても苦しからず。折角の思ひ立を半途にして下山せでは叶はぬやうなり玉ひては口惜しからむと教へ呉れければ、それよりは二町歩みては行き、一町歩みては憩ふやうにしけるに、甚しく疲れぬ前に少しく憩ふといふこと、いたく効を奏して、夜にこそは入りたれ。何の事も無く八合目の室に到り得、猶いさゝかの餘力は無きにあらず。次の日頂上を極めて、雲の海より日の出づる壯觀をよろこび稱へ、又憩ひつゞて御鉢めぐりをなし、須走口を下りて御殿場を経て、家に歸り着き、金剛杖は購はざりければ、持合せたりし契沖が富士の歌刷りたる扇

子に捺して貰ひたる項上の印を見つゝ、其の扇の風に旅の疲を拂ひながら、八合目の室に病を得て登山を果さざりし人のありしを思ひ、急ぐ忽れといふ古き教の新しき響を身にしめてさとりぬ。——登山の法——』

古き諺、古き訓であるからといつて、これを無暗に嘲笑し去る人がある。亂暴なことである。餘りに長く之を聞き、餘りに屢之に觸れた爲めに、慣れ親しみ過ぎて、何等の刺戟もなく、世の中に知られ過ぎてゐながら、忘れられてゐる古き訓を説いて新らしき實行を勤めるといふことは有意義な事である。登山に於ての實驗は、實に好例證であつて、誰でも心がけて居なければならぬ教訓である。

□樹の相。此の章に於ては、樹相にたとへて縦横に世態、人情の弱點を喝

破して以て戒しめてある。

人長じては漸く老い、樹長じては漸くに衰ふ。樹の衰へ行く相を考ふるに、およそ五あり。天女にも五衰といふ事の有るよしなれば花の樹の春夏に榮え、葉の樹の秋冬に傲るも、また復五衰の悲を免れざることにはや。樹の五衰は何ぞ。先づ第一には其の懷の蒸ることなり。樹の熱氣壯にして、枝をさすことも繁く、葉を持つことも多ければ、やがて風も日も其の懷深きあたりへは通らぬ勝となるより、氣塞り力闕へて、自らに葉も落ち枝も枯れ、懷蒸れて疎となるに至る。これは甚しき衰の相にはあらねど、萬の衰に先だてる衰なり。たとへば人の勢に乗じ時を得て、やうやく美酒嬌娃に親しむがまゝに、胸中の光景の前には異りて荒み行くが如し。不祥これ

より起らんとす。第二には梢止なり。樹の高は樹だに健やかならば限り無かるべきが如くなれども、根の水を送り昇す根壓力も、幹の水を保ち持つ毛細管引力も、極まるところありて其所に盡くれば、稀有の喬木も、其の高三百尺に超ゆるは無しと聞く。まして常の樹は、およその定例までに至れば、天をさして秀で聳えんとするの力極まり盡きて、また其の本幹の高をば増さずして已む。これを稱して梢止といふ。よろづの樹梢止に至れば、やがて生長の機そこに轉じ、發達の勢そこに竭きて、幾程も無く衰に現ず。たとへば、人の學問藝術より、よろづの事に至るまで、或地步に達すれば力竭き願撓みて、それより上には進まざるが如し。力士、優伶、書人、詞客などを觀れば、其の技の上に於ける梢止となれるものと、梢の猶止まら

ぬものと異なるさま、明らかに曉り知る可し。樹も人も、梢止となりて後は、榮華幾許時もある可からず。萬人に稱へられ、一時に誇る時、既に梢止の畫、梢止の文を爲し居るがおほし。矮樹灌木は、皆早く梢止となりて、葉を展べ、枝を張りだにすれば宜とせるに似たり。卑むべし。第三には裾廢りなり。松杉樅檜など、天に冲るまで、喬くなりたるは宜しけれど、地に近き横枝の何時と無しに枯れて、丈高き男の袴を着けずして素臙露はしたるを見るが如くなりたる、見苦しく危げなり。野中の一本杉など、裾廢となれるが、暴風雨には倒され勝なり。是たとへば人の漸く貴く漸く富みて、世の卑き者に遠ざかるに至れるまゝ、何時と無く世情に疎くなれるが如し。軍人官吏など、位高き裾廢となれるが少からず。徳川氏の旗下など、

用人給人の下草に蔓られて、皆裾廢の松杉となりしなるべし。第四に梢枯なり。梢の止りたるは猶可し。梢の枯るゝに至りては、其の樹やうやく全からざらんとす。歌ふ者の聲に潤無く、書く者の筆に硬多きに至るは、梢のやうやく枯れたるなり。梢枯れ初めては、樹も日に月に衰へて、姿悪く、勢脱けて見え、人も或は暴びて儼つくなり、或は耄れて脆げになり行く。一腔の火の空しく燃えて、双鬢の霜の徒に白き人など、まさしく梢枯の相をあらはせるにて、寒林に月明らかにして山の膚あらはなる禿頭もまた正しく然り。五十前後よりは人誰か能く梢の枯れざらん。第五には蠹附なり。油蟲は嫩芽に付き、貝殼虫は葉にも極にも付き、恐ろしき鐵砲虫は幹を喰ひ通し、毛虫根切虫それぞれの禍をなす。此等の虫に附かるれば、樹も天

壽を得ず、十分に生ひ立たで枯る。虫は樹に附くのみかは。亞爾箇保兒虫は酒客の臟腑を蝕ひ、白粉蟲は好もの、髓を食ひ、長半蟲は氣を負ふ者の精を枯らし、骨董蟲は壯夫の志を奪ひて喪ふ。さまざまの蟲、人を害ふこと大なり。樹木の五衰上の記すが如し。一衰先づ起れば、二衰三衰引き續きて現はれ、五衰具足して、長幹横はるに至る。歎く可く恨むべし。人もまた樹に同じ、衰相無き能はず、たゞまさに老松古栢の齡長うして翠新なるに效ふべきのみ。

□ひとり言。この章には、短かき感想、警句が集められて居る。この章とこの次の『人の言』の短かい断片語の中には新徒然草といつたやうな氣の利いた隨感と實に玉のやうな處世訓や、あらゆる世相に通じて後の世渡り術

や、社會すべてのものに對する感想が燦として輝いてゐる。而して、また、この中に於ける、女の感想乃至女性觀には、どこまでも、老熟した、くだけた博士の氣の利いた感じ方や、ウィットに富んだ文章は全く一分の隙もなく、全く自然に飲み込ませる。蓋し、この二章は此書の中で、最も勝れ、最も面白い、最も代表的なものである。由來、警句や金言の類は之を解釋すれば、其の味を無くして了ふものである。故に、たゞこの中の優章佳句を抄出して見る。

もの思ふものを人といふ。なまじひに悟りて物思はざらんは、人たる甲斐無く、口惜し。心のまゝにするは毛ものなり。みだりに狂ひて事を仕果

せんも、けものめきて、はかなし。

○ 眞珠は貝の。戀は人の。

○ 涙は鹹からき水ならず。たゞこれ色なき血のみ。

○ ある老いたる紺搔の申しける。たゞ淺く度重ねよ、佳き色其の中にあらん。

○ 世にありて財を保ち身を保くせんとするは、大空にたゞよへる雲を釘づ



けにせんとするが如し。

○  
人の心はやがて世に無き物をも作り出すなり。野猪を畜ひ、山鶏を飼ひ、野鴨をかへばやがて豚といひ、鶏といひ、家鴨といふ物、世に出で来るなり。菊牡丹の珍らしきを好めば、さまざまの菊も牡丹も世に現はれ、いくたびか接穂されては、終に核子の無き蜜柑さへ世に出づ。恐ろしき火も、凄まじき水も、天の降せる災とのみは云ふべからず、まことは人の招ける禍ならぬかは。今の拙き人の世は、即ち今の拙なき人の心の拙き成せる書なり。

○  
白き布に墨のつきたるは汚なり。紺紙に胡粉の付きたるも汚れなり。けがれに定まれる性なし、地の色とたがふを汚といふ。此故に木工は、器成る時は先づ必ず豫め汚す。其の汚れざらんことを欲すればなり。されば堅き木にて作れるものは、石灰、羅格鳥特、茶粉などを塗りて、桑色に汚し、柔らかき木にて作れるものは、砥粉、煤、榜葛刺など塗りて汚す。是皆汚を厭ひて先づ自ら汚すのみ。寒山は乞丐をもて汚し、桃水は顛狂をもて汚す。惜氣なきところおもしろし。自ら汚すは汚に遠ざかるの道なり。

○  
家居調度は申すに及ばず、草木を愛づるにさへ、富める人はおほかたは世にあるまじきやうなる珍らしきものを好みて、我が方にのみこそかゝる

ものはあれと誇り顔なる。たゞ財を費したるを示せるに似て、賤しくすさまじ。朝顔の花の、菊の咲けるに似たる、萬年青の葉の、鍋の立ちたるやうなるなど、まことはたゞいぶかしむべし。何の愛づべきことかあらん。資朝朝臣にあはゞ皆掘り棄てらるべきのみ。またやゝもすれば、顔回が瓢、孟母が鉄などいふものを、千金をもて購ひて飾り立て、悦ぶ人あり。甚だしきに至りては、神農が嘗めさしたる草の葉、小確の命の用ひたまひし火打石などいふやうなるものを、數限りも無く、したゞか貯へ持ちて、うるさく人に示しては此の上も無く爲たりげなる人あり。いづれも皆おもしろげなくて、しかも卑し。遠き國のもの、ねぢけかじけたるものなどは、おしなべても誇りがたけれど、先づは見にくし。庭の草木は常體にて好き

が好く、調度置物手あそびなんども、佳きは佳し、古く稀なるが宜きにはあらず。鴨屋宗安が褒めし古き戸をば、宗易が、定めて遠き山寺などよりわざと乞ひ求めて齋らし來れるならん、面白からず、といひし心こそおもしろけれ。

○  
書畫骨董をあきなふものは、愚にして富めるもの、高慢に税を課せて取り收むるのみ。

○  
釣を垂れては、つくづく人間の技の小さくして、天運の力の大なる事を知り、棋を試みては、七情の騒げども益無く、一理のたゞ頼むべきをおも

ふ。

○ 多く人の上の嚙<sup>うは</sup>して嘲み笑ふ事を好むものの振舞<sup>ふるまひ</sup>を心をつけて見るに、たましく其の嘲み笑ふべき話柄を得ぬ時は、みづから作り事を仕出<sup>しだ</sup>して、之を人の上に押し被<sup>かぶ</sup>らせて、さて悦<sup>よろこ</sup>びて嘲み笑ふなり。其のさま恰も狗猫のものが吐<sup>は</sup>き出したる汚れを、復<sup>また</sup>悦<sup>よろこ</sup>びて嘗<sup>な</sup>め食ふに似たり。よつて知りぬ、世に何のゆゑとも無くて湧き出づる誣言<sup>しひごと</sup>いつはりごとは、多くはかゝる人の作り出すものなる事を。さまで要無き事をして人も人を嘲み笑はんとするは、さてまた人を嘲み笑ふが如何ばかり賢<sup>かしこ</sup>きわざなればぞや。

○ 志すところあるものは身を惜<sup>お</sup>しむべし。むかし身延<sup>みののぶ</sup>の日遠上人、飯高の學校に在りし時、衆徒の浴室<sup>よくしつ</sup>に入るに衣を脱して背に灸<sup>あ</sup>の痕<sup>あと</sup>無きものを視<sup>み</sup>ては嗟嘆して、此の子、學に志無きか、と云はれしとなり。灸治<sup>あじ</sup>はせてもあるべし。生<sup>なま</sup>を衛<sup>まも</sup>る道<sup>みち</sup>を知らず、或は常に病み、或は蛋<sup>たま</sup>く死するは口惜<sup>くちやく</sup>し。

○ 米果物など嚼<sup>か</sup>みて壺の中に吐き貯ふれば、夜を経て酒となる。眞蠟<sup>しんろう</sup>の美人酒といへるは、美人をして物を咀<sup>か</sup>み含みて作らしむが故よりの名なりといふ。我が邦にても酒つくることを釀<sup>か</sup>むといひ、大隅琉球には皆嚼<sup>か</sup>みて作れるためしあり。大古<sup>おほいに</sup>の人のおほやうにさかしらげ無き、人の嚼<sup>か</sup>みたるも

のをも嫌はずして飲みたるなるべし。今は我が爲めに嚼むものもあるべからず。又人の嚼みたるを飲むものもあるべからず。智は進み、情は退きたるなり。かくての世のさま、貧しきものゝ酒は水の如く富めるものゝ酒は油の如くなりぬ。賓主相悦びて飲むも、おもへばたゞ／＼錢を酒盞に盛りて飲むにひとし。貧しきものには、あらあぢきなの世や。

○  
みえの行きどまりは、馬鹿げて大きな重き石をかつぐ事なり。

○  
我は顔して、我は神をも佛をも頼まずといふ人を見れば、多くは篋中竹庵山井庸仙などを神とも佛とも敬ひかしづけるなり。

○  
香木をたくに、其のまことの芳しき氣は、烟の未だ微少も立のぼらぬ先に迷り出づるなり。人の心の匂もまた然り。其の人の一念我にむかひてまことに優しく美しき時は、其の人いまだ口を開きて言葉を出さず、身をもて行を示さずと雖も、はや其の優しき美しさの溢れ進りて、我が胸に浸み透る心地す。此の心の匂のいつもめでたき人をば徳ある人とは云ふなり。

○  
要ありて、明日の朝、何の刻には必らず起き出で、かくかくの事を爲さん、と深く思ひ入る時は、其刻に至りて多くは目さむるものあり。睡りたる我をば其の刻に至りて呼び起して覺めしむるものは何ぞや。我ならば

我は睡り居れるなり、丑の下刻も寅の上刻も知るべきにはあらず。我ならずば我がほかに人はなきなり。右隣も左隣も來れるにはあらず。そもそも睡れる我の如何にして睡れる我を覺ますぞや。又抑々睡れる我の、眼を開かず、燭をも秉らず、時計をも探らずして、如何にして今の何の刻に當るといふ事を知りて、睡れる我をさますぞや。我の中の無我か、無我の中の我か。此の睡れる我を起しさます我を主と仰ぎて身を終らんか。一度は覺まされながら、睡むたし睡たしなんどして復寢入らんとする我が爲に奴とされて世を終らんか。人の一生の追分はこゝにありといふべし。

○

我が家を立出て、人を訪ふ時の途すがらなど、何かは知らず遺れもの爲

たりとは思ひながら、其遺れたるものを思ひ浮め得て、あやしくも心にさざ浪立ちて鎮らぬことあり。既に遺れたりと覺ゆるからには、其遺れたるものをば知るべき筈なるに之を知らず。又何を遺れたりといふ事をも覺えぬからには、遺れ物をしたりと悟るべき筈も無きに、何となく遺れたることを知る。此の心地のあやしく奇しきを味はふに、恰も我は一つの我ならで、今の我のほかにまた一つの我といふものありて、彼の我の此の我に服さぬげに打咳けるごときを覺ゆ。——潜在意識——事は異なれどもこれと同じやうに、人は其の求むべきものをば何とも知らぬながらに、猶あてもなく、其れども知らぬ或物を、求め得たしと思ふやうなる事あるものなり。人ほどをかきものは無し。——天地の精靈に會ひたし——

○  
人に見えぬ心の中を悪くして行を善くするは易かるべし。人に見ゆる行はたとへ宜しからぬやうに思ひ做され取り做さるゝとも、それにはかまはで、我が心の中を善くせんとするは、却つて難きふしあるべし。孝子といはれんよりは孝子と云はれずして孝を盡さん事、難きもひとしほ難かるべけれど、めでたきもまたひとしほめでたかるべし。——尊内卑外——

○  
毒を喰はゞ皿までとは、いやし過ぎたる諺なり。毒を喰はゞ喉へ指をやれとありたきなり。伊達政宗の蒲生氏郷に毒を仕込みたる茶を薦めたる時、氏郷は知りつゝ之を飲みしが、外に出づるとやがて西大寺を服して之を吐

きしなり。——改むる心——

○  
樹を愛して葱蒨を致せば禽おのづから來り、花を養ひて芬芳を致せば蝶おのづから到る。禽と蝶とを招くに意無くして、禽と蝶との來るところに、無限の天趣の我に攝するあるをおぼゆ。

○  
人は三つの愛に生き、一つの愛無きに至つて死す。いとけなきほどは、親の愛の中に養はれて生く。父の力、母の情、春の天の暖むるが如く、夏の地の蒸すが如き中に、弱き身は扶けられて、さてわづかに人となる。既に長じては、男は妻の愛の泉に涵されて、苦しき世にも心の乾き枯れざる

を得、女は夫の愛の蔭に擁いだかれて、たより無き身の生命安らかなるを得。又老いての後は、子の愛を思の綱つなとして、これに牽かれて生く。親の愛、配偶つれあひの愛、子の愛、此の三の愛のあればこそ、人も生甲斐ありて、生き居りもするなれ。親は無くとも子は育つと云へど、親の愛にはぐくまれぬ兒を見れば、瘠やせたる山の拗ねぢれたる樹を見るが如し。力はありても優しからず生立つ。妻無き男を見れば、巉巖せげに雲断え、怪石の水を失ひたるが如く、其の好きものも、古書ふるしよの半破れたるを観るに似、其の悪きものは、鏽刀さびの室無きを望むがごとし。夫無き女の老いたるは、薔薇ばらの花すでに謝して刺さいたづらに硬こきが如く、猶若きは、山の禽とりの雨にしほたれて翼つばさ悲しく窄すぼるを見るが如く、忌はしく又あさまし。眼めかすみ身かゞまりて、兒も無く孫まご

も無き人は、或は若がりて紅燈の下に兀頭はげあたまを光らせ、或は老を忘れて緑酒の波なみに白鬚しらひげを濡ぬらせども、掩おほへど争へぬ淋あびしさを酔醒よひざめの咳せきの響こゑにあらはし、或は詩に塵寰ちんくわんをないがしろにするの高致たかむぎを誇り、或は茶に禪味ぜんみを搜さぐるの幽意こゝろを沸たぎらすれども、紛らし難きあぢきなさを獨座ひとりざの面の顰ひそみに示す。およそ此等のさまを思ふに、愛執は佛の呵しかるところなれども、まことに人の世の味はたゞ愛の鹹しほによりて調へられ、愛の鹹氣失すれば羹臙かうりやく皆敗るゝなり。古き諺ことわざに生相憐あはれみ、死相捐すつとあり。人は相憐あはれみ相愛しては生き、生きては相憐あはれみ相愛し、相憐あはれみ愛せずして相棄すて捐すつるに至りては死し、死しては相棄すて相捐すつるなり。三の愛皆備そなはりては、美はしく健すこやかに生き、一の愛も存せぬに至りては、世と相疎うとくして、死と相近ちかからんとす。風止み

ては火おのづから滅えんとし、雨遠くしては草やうやく枯れんとす。愛のある間のみにこそ人の世はあるべけれ。

○

我こゝに生く、人によりて生きるにあらず。我こゝに存す、人のために存するにあらず。人の愛するところとなりて生くは、人の愛するところたらずして生くよりも好し。しかも我は人の我を愛すると愛せざるとによらずして生けるをもて自から祝すべし。吾が愛の心に燃えて其の爲めに存するは好し。しかも我は我が愛す可き者の存すると存せざるとによらずして存するをもて自から祝すべし。一切の人に愛されずして、而も能く生きて死せず。一個の愛す可き人を有せずして、而も猶と相捐てざるを得ば、徳

に於ける匱しと雖も、またみづから慰むべし。

○

光明強き時は、陰影もまた強し。愛深き人は憎もまた深し。神も妬の無きものにはあらず、佛も他意あるものを救はずとはいへり。神にも佛にもあらぬ素凡夫の、なまじひに平等の無差別のとして、おのが女房を片最負にせぬなど、傍痛き限りなり。

○

憎くて憎きは、人の義の足らぬこと。愧かしくて愧かしきは、吾が情の至らぬこと。



□人の言。その序に曰く、

そのむかし足利時代に成りたる書に一言芳談ことばうたといふものあり。何人の編みつゞりたるにや明かならねど、然阿上人ぜんあよりは後、兼好法師よりは前に作られたるものにて、慈鎮じちん、明遍みょうへん、解脱げだつ以下それ〳〵の高僧碩徳たちの語の、道をすゝめ心を發すに足るべきを、次第も無く取り蒐めて、世の人々に迷を開き悟さとに入るの便べんとなせるものなり。今こゝに其おもむきを取りて、其姿すがたをうつし、我が知れる浮世うきよの人々の語の、我をして或は面白しと思ひ、或は實にもと黠頭うなづかしたるを、何の次第も無く取り蒐めて、我が心の友となし、談の敵となす。一冊となせるに臨み、私にこれを名づけて浮世一言芳談ことばうたと申し、又人の言と申し待る。

と、博士が云つてゐる通り、所謂浮世いはゆるの中で、すいも甘いも、すつかり噛みしめた人の、全く廣い浮世、俗世間、社會一般を相手にして、面白いとか或はげにもと黙頭うなづかせるやうな處世經驗談しよせいけいけんだん、經驗より來つた世渡り術、其他さういふやうな種類の訓言くんげん、警句けいごが集められてある。面白可笑しく、くだけたる言の陰に、嚴然げんぜんとして犯し難い戒いまいめがあるのは、博士の人格の現はれでなければならぬ。母のやさしさと、父の嚴格げんかくとを兼ね備へた圓滿まんまんなる人格の發露である。

○  
教育の苦心。

年若くて夫に別れ、幼より養ひたるたゞ一人の子を頼みの杖つゑとも柱とも

して、終に其の子を世に立ちて羞しからぬほどの人になし果せ、今は心やすく世を送る老いたる女性の申されける。我わが養ひ子を生したつるに、心を苦しめ思を費したること一言ふべくもあらぬなり。特に我が眼の前ならぬところにて、如何なる事をなし、如何なる遊びをなし居るならんと慮るにつけては、一ト方ならず胸を痛めけるが、後に圖らずも我が眼の及ばぬところを見徹すの道を得たるより、復女の常の習ひなる思ひ過しといふことをせざるやうになりたり。そは毎日毎日我が子の眠れる間に、其小き蝦蟇口を極めて、一日の使ひ棄てたる額を明かに知り、さて我が子が用ゐる品々の中にて新に購はれたるもの、有無に照らし合はすれば、おほよその冗費の額を知る事を得。學問に心入れ深き時は、手帳、筆、鉛筆など

の精品を買はんがために金を費すことはありとも、冗費は必ず少きものなり。又藝事に心の入らぬ時は、冗費必ず多く、悪き友と交る時は、冗費愈々多くして且不定となるものなり。かく冗費は心術と行狀との良否を表はすこと、比へば寒暖計の暑さ寒さを表すが如くなれば、これによりて我が眼の及ばぬところを察して、それらの心備をなし、善きことを其の弱きに扶け、悪きことを其の小なるに懲らすに、其の功甚だ大なるを覺えたりと。

○ 或る田舎の人の云ひける。掌の皮の薄きものには心の病多しと。

恐ろしき女の偽らぬ情。

一生に幾人となく夫を替へたる恐ろしき女の云ひける。はじめて夫と頼みたる男を振り棄てし時は、よく／＼心に染まねばこそ思ひ切りたるなれど、さて年を経て後は、其男を戀ひ思ふ日少からず。幾人も夫を替へて後、また夫を替へし時は、堪え難しといふほど厭はしからぬことも振り棄てし、しかも其後に至りても思ひ出だす日少し。これを思ふにつけても、女の初めて夫と頼みたる男を棄つるは愚なる事なりと知りたり。男を振り捨つる時、おのれ賢しと思はぬことは無かりしかど、と申しき。

○  
ある家の老婆、其孫の智慧早きを憚らずして云ひける。兩親の子を愛す

ること強くして、子に對ひて物言ひかくることの多ければ多きほど、其の子の智慧は早きものなり。それを生れつきの賢なりと思ふは、親の慾目の愚さにて、賢し／＼と云ひ囃されて育つは其の子の爲に益ありや否や覺束無し。世の多くの幼兒を見、またその育ち行くを見て、おのれは我が孫の賢しと云はるゝを喜ぶこと能はずと。

○  
ある僧の老いて徳高きが云ひける。寺まゐりの好きなる若き女を、寺まゐりに無精なる若き女より殊勝なりと思ふなかれ。藝人、藝妓、浮氣者、泥水商買のものなどは、思ひのほかには、櫛線香など手にする事多きものなりと。

と、これ第二なるべし。吾が才徳力量學術の足らざること、これ第三なるべし。人に誤り解せられて、無實の責を負ひ、咎を被りたるこれも苦しといふべし。——苦のさまざま——

さりながら、人の世に在るや、肩あれば衣ざることなく、口あれば食はざること無しと云へり。粗糲といへども一鉢の飯あり、寒冷といへども一盃の水あらば、則ち活くに堪ふ。最も身に近き苦も、さばかりは人を苦しめぬものなり。男兒の身に肉を包み、肉に骨を有する、自から信ずる處なくしてはあるべからず。苟も自から信ずる處あるや、最も心に近き苦は無きなり。心身に緊切親近するの苦にして此無きや、何の眉を蹙め神を傷ましむることかこれ有らんや。身に近き苦と心に近き苦と共に排す可し——

語に曰く苦中の苦を喫せずば、人上の人と爲り難しと。苦境に立つをば甘なふべきなり。苦境を避けて走らんとはなすべからざるなり。

古の人を學ぶに、古の人の功を成し意を遂げたるの形跡を見て之を學ばんとする勿れ。汲むことを善くするとも、古き河にも古き水は流れぬなり。古の人を學ぶに、古の人の苦に堪へ心を鍊りたるの眞處を看て之を學ぶべし。磨ぐ術を悟りぬれば、刀の刃は刀の利味を出すものなり。刀の研にあふは、刀に取りては吾が身の瘦するほどの苦境なり。干將莫邪も礪に遇はずんば吹毛を斷ずるに至らず、英才大器も苦境に立たずんば有用の人たる能はず。歡んで苦境を迎ふべきかな。——歡んで苦境を迎ふべし——

先づ博士は、卷頭に於て、人間生活の苦と樂とを説き、詳に世態各方面

きたる下駄の、左まで價高からぬを取り替へ引き替へて穿き、しかも其下駄新らしき時は、やゝ丁寧に行儀よく揃へて脱ぎ置けど、少し古びの付きたる頃には、埒も無く脱ぎすて置くなり。此人心の中に毒は無けれども、世にいふ浮氣者にて、かゝる人の妻となるものこそ口惜しき目にはあふなれ。たゞ此人の取りどころには、負けぬ氣聊か強ければ、悪しき友にだに狎れずば、行末は次第に宜かるべし。栗山といふ人を見たまへ。おのれの錢をもて買ひしことのありや無しや、いつも彼の人の下駄は古びに古びて、世諺にいふ上潮に浮きて流れしものに似たり。前壺の緒を、紙撚もて自ら繕ひたるさま拙く可笑しく、横鼻緒の斷れたるを、礫を填めて保たしめたるさま、いよいよ拙く愈々をかしく、彼の人の下駄を見れば時々失笑す事

のあるなるが、それには似ず書物などをば買ふことは多き様子なり。それのみならず、言葉少けれど人に高ぶるにはあらず、起居田舎びたれど物に斟酌あり。彼の人には必ず業成りて名を成し、富みて古を忘れぬ人なるべし。君は如何にや思したまふ。すべて我が履物にて人を觀定むるは、事甚だ鄙しけれど、却つて占卜などよりは能く中るなり。と誇りき。

○  
小指の爪。

ある小賢しき女の申しける。手の小指の爪を長く伸ばしたる男は、人と相争ひても打ちつ打たれつする迄は得争はぬものなり。小指の緊しく締まらねば手の力は無きものなれば、小指の爪を長々と伸ばし置けるほどの者は、

人と攫み合ひなどする時に、おのが小指の爪の長さが如何ばかりおのが爲に不利を興ふべきかといふことをもかつて覚えぬばかり弱き氣性の男なるべきにや。我針を運ばせて物を縫ふは、左まで力もいらぬことなれど、ある時小指を傷つけてより、日頃人知れず縫ひ物するためにも大に小指の働き居るものなる事を悟り、そのち不圖心づきて、小指の爪の長さ人の氣性を推測するに十に一つも過つ事無しと。

○  
美しさの二種。

或る人相見の申しける。女の相は美しさより好きは無き道理なり。されど人相の道にては、美しさを必ずしも芽出度しとはせず。その所以を如何に

といふに、美しさに二た通あり。人の玩弄品となるに適するやうの美しさと、おのづから人の玩弄品となるには適せぬやうの美しさとなり。藝妓、娼妓などには、人の玩弄品となるに適する美しさを具へたるもの多し。また氏貴く位高き際の姫君などには、然ならぬ美しさを具へたまへるが多し。此の美しさの二た通りを能く見覚え置きて、玩弄品に適するやうの美しさを具へたるものを、幸福薄しと判じ知るべきなり。また一度は身を賤しき境に落したるものにて、力ある人に援け出されて、遂に富貴をするものあり。それは必らず玩弄品となるに適せぬやうなる美しさを具へたるものなり。我が此言中らずんば、一切の相の道の書は焼き亡ぼすべきなり。

○

## 醜婦の毒語。

ある醜<sup>みにく</sup>き女の申しける。生れつきて色白く、眉<sup>まゆ</sup>にほやかに、鼻高く、眼す  
 じしく、まづは好き女なりと、おほかたの人に褒<sup>ほ</sup>めそやさるゝ女は、いつ  
 とよりなくおのが美しさを誇<sup>まこ</sup>る心の湧<sup>わ</sup>き出づるものと見えて、十人に九人  
 までは、多くの人々の集まりあへる中などにも我は顔するものなり。美  
 しきが眞<sup>ま</sup>實<sup>じつ</sup>にもせよ、我が心の持ち方の良<sup>よ</sup>きためなどにて、人は愛<sup>め</sup>でらる  
 ゝに至りたるにもあらぬ事なるを、我はと思ひあがれる面つき、見にくゝ  
 もまた見悪<sup>みにく</sup>き極なり。世に色好<sup>いのこみ</sup>む男の少からんには、美しく生れたる女は、  
 今にも増<sup>ま</sup>して美しきが多からんを、色好<sup>いのこみ</sup>む男の女に阿<sup>おもね</sup>り諛<sup>へつら</sup>ふことの甚しき  
 がため、あたら美しき女に、我は顔させて痛<sup>いた</sup>く其の美しさを殺<sup>そ</sup>ぐこそ、愚

なる事なれと。憎<sup>にく</sup>まげに罵<sup>ののし</sup>りたる、其の面<sup>おもて</sup>の色、紫に火<sup>け</sup>めきて見えたり。

## 夫としての男。

世の味の酸<sup>す</sup>さも辛<sup>から</sup>さも知り盡したる女の申しける。家の外にて優<sup>やさ</sup>しき男は、  
 家の内にて苛<sup>いらひど</sup>酷<sup>こ</sup>き男なり。他家<sup>よそ</sup>にて老<sup>ま</sup>實<sup>じつ</sup>に立<sup>たち</sup>働<sup>はたら</sup>く男は、おのが家にて横<sup>よこ</sup>の  
 物を縦<sup>たて</sup>にもせざる男なり。親しみ易<sup>やす</sup>くして頼<sup>たの</sup>もしげに見ゆる男は、多くは  
 夫として情無<sup>なさ</sup>き男なり。俗に言ふ『ぶつきらぼう』の男の、愛<sup>あい</sup>想<sup>そう</sup>氣<sup>け</sup>無<sup>く</sup>くて近  
 づき難<sup>がた</sup>きやうなるに、夫として頼<sup>たの</sup>もしきか却<sup>かへ</sup>つて多<sup>おほ</sup>きなり。かゝることは  
 憂<sup>うれ</sup>き世の浪<sup>なみ</sup>に身をはふらかして、鹹<sup>から</sup>き水をしたゝかに吞<sup>の</sup>み、浮<sup>う</sup>きつ沈<sup>しづ</sup>みつ  
 して苦しみたる後ならでは心づきかぬることなれば、口<sup>くち</sup>惜<sup>お</sup>しくも若<sup>わか</sup>き人た

ちは、あらぬ男を好きものゝやうに思ひて、自ら幸福少き籤を抽き當つるが少からぬなり。考へても見たまへかし。行正しき男の、女の心を攪るやうなることは有るべからざる筈ならずや。將又女の心を攪らんら欲ふとも、行正しき男ならば、何時、何處にてか其術を學びてあらん。こゝをもて我が言の虚偽ならぬを知り玉へと云ひける。

○

日本の女の粧飾。(かういふみだしではないけれども、其内容からとつて、解り易きために、かうして置く。)

或外國の人の申しけるよし。日本の婦人は極めて細なる粧飾を好みて、粧飾の本の旨には協はざるものにも貴き價を拂ひたまふこそ心得ぬ。頃日

或貴き人の笄といふものを示されけるを手に取りて見しに、小さなる短き棒の兩端に、黄金の粉其他の貴き材料を、驚くべき精密巧緻の技術もて取りあつかひて、ほとく眼鏡なくては見分け難きばかり細かに、美しき景色の畫を現はしありしを見出したり。おのれは外國のものゝことなれば、遠慮なく問ひ試みて、其の二つの景色は、いづれも日本の有名の勝地の實を寫したるものにして、一端のは安藝の宮島、他的一端のは陸前の松島を描けるものなる事を知り、且又同じ人の有てる櫛に、丹後の天の橋立を描けるがありて、其の櫛と此の笄とは、相待つて意匠の完き圈を成すものなる由を聞き知りぬ。おもふに是の如き品の意匠は、必ず工夫者の苦心に成り、又其の圖の名ある畫工の下繪に藉り、其の蒔繪は巧妙なる工人の少か



らぬ時間を費して後、辛くも一具の裝飾品として成就したるなるべし。されど外國に生れたる我等の偽無き感じより云へば、多くの苦勞は皆益無きことに用ゐられたるを可惜しく思ふのみにして、少しも面白しと思ふこと無し。笄も櫛も黒き頭髮の間に挿さるゝ小なる裝飾品にして、特に笄の如きは、僅かに其の端を露はすに過ぎざるものにあらずや。されば、此等の品に、毛の如き細き線、蜘蛛の圍の如き微なる彫刻など施されて居るとも、誰かは其の笄に何處の景色の畫が、れ、其の櫛に何人の下繪の上され居ることを認め得んや。日本の家の室は小なるを常とはすれども、如何に賓主相近づきて座すればとて、僅に無名指ほどの太さの笄に描かれたる景色を、何處の景色なりと認め得て、さて其意匠の面白さをまで感嘆し得るが如き

眼の鋭くて心の細なる人は有り得べからざることなるべし。おもふに多くの人は左ばかりに貴き櫛笄を見ても、たゞ僅に其の蒔繪の黄金色の光りの、黒髪の中に隠見するを認むるに過ぎざらんのみ。若し、我等が此の觀察にして誤らずば、手に取りて視るにあらずば見別け難きほどの纖細過ぎたる細工を笄などに施せるは、無益に材料と苦勞とを費したるに過ぎざる愚なる物好といふべきならずや。裝飾の本旨は、價高き物を身に貼け、頭に簪しだにせば宜しといふにはあらず。裝飾の眞の義は、美しきを好む人の情の貴き働を眼に見ゆる物として現し出すにあり。此故に、美しさを添ふるといふことには何の關係も無き精密巧緻なる價高き骨董品を頭に戴くが如きことは、其の人の富めりといふことを現はすほかには何の能も無き愚な

ることなり。香も無き野の花の一輪を、田舎の娘の頭に挿したるだに、或時は其の娘のために美しさを添ふることあり。得難き寶玉もて綴られたる瓔珞を、貴き女の戴けるだに、或時は其の人のために美しさを添えぬことあり。裝飾は價高きもの必ずしも裝飾の本旨に協ふにもあらず、また價低きもの必ずしも裝飾の本旨に協はざるにもあらず、さるを日本の都人の富みて貴きは、細工の精きものは必ず好き裝飾品なりといふやうに思ひ誤りて、極めて細なる細工を好むまゝ、裝飾の本の旨には協はざるものにも貴き價を拂はるゝこそ心得がたき事なれ。我等が眼より見る時は、三十歳より四十歳に至る間の富める日本婦人は、裝飾品と云はんよりは骨董品といふべきものを頭に戴けるが多きやうに見ゆ。をかしき事の限りなり。可惜

しき事の限りなりと誇りぬ。彼の邦の物にも、益無く細かなる細工の裝飾品の多からぬかは。

○

細かき飛白。

同じ人の申しけるよし。日本の人は男女に限らず、飛白といふものを好みて衣るなり。さて其の飛白の粗きは擱き、細なるは蚊の飛べるが如くなるが、細なるに従つて價高しとなり。如何にも之を織ることの難き易きによりて、價の高低は生ずべければ、細なるが高きは道理なることながら、其の細なる好みて高き價を惜しまぬ道理は明らかならず。僅に一間も隔たらで、之を望むに殆ど無文の如く見ゆるものを、如何なれば日本の人は然ら

かり好ましと思ふらん。蓋し日本の紳士貴女は、「我は價貴きものを被たり」といふ「賤しきことに就きての高慢の味」を甘しとするに過ぎたるならずや。いぶかしき事なりと罵りけるとか。

○

## 女と食事と。

或る老いて賢き婦人の申されける。人の娘のよしあしを考ふるに、其食事の模様を尋ね聞く時は、十に七八までは目利して過らざるを得るなり。先づ三度の食事の多き少きを問ひ、次に間食を好む好まざるを尋ねべし。三度の食事も少くして、間食を好むことも然までならぬは、身體の強からぬといふまでにて、論無し。三度の食事も多く、間食を好むは、身體の弱か

らぬといふまでにて、これもまた論無し。定まりたる三度の食事を取ることに少くして、間食を好むこと甚だしといふものは、必らず宜しからぬ女なり。さる女は、間食すること多きために定まりたる食をなすこと少く、定まりたる食事を身の程に應じてせざるがために間食を欲すること甚だしき習慣を養ひ成せるにて、多くは皆心無くあまやかされて育ちたる憫むべき女なり。三度の食事をなほざりにするは、規律を重んずる心薄きなり。間食をほしいまゝにするは、おのれに克つをば良き事とは思はで、我が心のまゝに振舞ふを快しと思へるなり。間食の胃を害ふことは言ふまでも無し、心を害ふこともまた決して少からず。(中略)定まりたる食事毎におのが身に取り量は少からず、間食することの稀にして又少きものは、先づ教育訓

練に得堪ふべき女なり。嫁に迎へんとならば、ゆめく間食に慣れたる女などを家内に容るゝことなかれ。(下略)と。

○  
 或曰く。人に口錢を多く取らせながらぬやうなる狭小な氣象のものは大富をなすに至らずと。

○  
 或曰く。如何なる人も一生に幾度かは好運に遭ふなり。たゞ其の好運に遭ひたる時、吾が常の中に持ち合せたる少しの物に心ひかされて、其ために兩手をひろげて其好運に攫み掛らぬより、惜む可き運を取り外すなりと。

○  
 或曰く。智慧は人の智慧を使ふより大なる智慧無く、資本は人の資本を使ふより大なる資本なし。世に立つて人の智慧を使はず、商買を爲て人の資本を使はぬやうにては、爲し得るところ幾干もなしと。

○  
 或曰く。運に乗る時は愚も智も同じ。敗戦の時、怪我をせぬを眞の功者といふべし。富をなすは運に乗るにあり、富を保つは敗戦を巧者に戦ふにあり。碁は先手にて勝を大きくし、見切りにて敗を小さくすと。

○  
 十人に一人。

或予に教へて曰く。人の他の謗るを聞きて迷惑氣なる人は、其品高くて好

し。悦ばしげなる人は、たとひ才學すぐれたりとも、其品卑いやしくて好からず。人の他ひとを誘そしるを聞きて、眞まことに苦々しくおもふ人は十人に一人あるべからず。其の人まことに尊とうとぶべしと。

○ 竊盜の言。

ある竊盜せつとうの上手云ひけるよしなり。夜更け人定まりたる頃、若き女どもの笑ひ語る聲を聞かば、一ト時過ぎて忍び入るべし。偷盜ぬすみの術拙つねくとも、盗み損そこなふことはあるべからず。其家には年老たる人無く、心細なる主無く、よろづ不取締ふとりしまりにて、勝手口掃除口などに、戸の鉤鐵かかけを掛け忘れ、栓せんをおろし忘れたるなども有るべければなりと。

○ 或上人の教へたまへける。たゞ昨日の事をば忘れて忘れ得よ。今日の事をば做ひして做し得なむ。たゞ明日の事をば思はず思はずあれ。今日の事をば捌さばきて捌き得なむと。

○ 女の悦ぶところ。

或人曰く。女はすべて強き者を悦よろこばで、弱き者を悦よろこび、大なるものを悦よろこばで、小さなものを悦よろこび、優すぐれたるものを悦よろこばで、劣おとりたるものを悦よろこぶなり。女の言葉にてかはゆしといふは、弱く小さにして劣おとりたるといふ意に通とぜるをもて知るべし。されば男もし頭を擡あげて昂然こうぜんたらば、女の尊敬そんけいを

得ることはあるべし、愛惜を得ることはあるべからず。氣を和めて鬻乎たらば、女の尊敬を得ることは無くとも、愛惜を得ることはあるべし。特に心傲れる女は必らず少年を愛し、才高き女は却つて痴漢を憐むこと、歴々として世に多き例なりと。

以上は『人の言』の抄録である。熟讀、玩味して以て、讀者の修養に資するところ大なる者があることを推奨して置く。

□三端。

人事くさくありといへども衣食住の三つを其の本とし、人情さまく

なりといへども親子夫婦の二つを其の始とす。衣食住身のほどに叶ひて、あつかひも拙からず、親子夫婦睦び親しみて、聲音やさしく物云ひかはすやうならば、其の人或は世に誇らるゝことありとも、我はむしろ誇る人こそ疑はめ。

衣

一家の内にかゝ一人おのれのみ美衣を着飾るものある時は、老幼男女の心皆悪くなるなり。特に主人の妻などの猶年若きが、何ぞの折につけて、さらゝかなる衣引纏ひつ、我は顔するやうに見ゆる時は、主人の父母はさてもあるべし。妹、弟、女姪、姪などは、胸の中おのづから平らかならで、心もやうやくひづみ行くめり。破れたる布子被て、美しき衣裘被たる

人と竝び立つて慚ぢざるは、男だに大方のものは能くせぬことなるを、まして年ゆかぬ女などの、解洗ひ衣被て、縮緬被たる人の傍に坐らんは、如何ばかりかわびしからん。さればやがておのれも人と同じやうなるもの、若しくはそれにも勝りたるを被んことを願ひ、その願叶はざれば恨み悶ゆるに至りて、家の内やうやくに由無き風も吹き募り波も騒ぎ初むるなり。心すべし。

貧富は俄に如何ともすべくはあらねば、着るものゝ絹も木綿もそれは人々の分にあるべし。たゞ肌着のみは、如何なる人にてても務めて清くせんには、清くしがたき事もあらじを、餘所の見る目も疎ましき迄垢づきて油臭くなりたるを着て、蝨といふものゝ身をせればなるべし。折々は人をも

羞ぢず爪の音さへしたゝかにぼりくくと痒きを搔くなど、いとあさましく、人からも無下に卑しく見ゆ。されど男は猶物にかゝはらぬ大やうなるさかとも見はやすべし。其の妻はあるべきやうにもあらぬさまして日を送るか、と、うたてくあさまし。蝨は綿絮より生ひ出づるか、垢膩より生ひ出づるか、少游と東坡との言ひ争ひし末、佛印といふ僧に判せしめけるに、佛印咲ひて、垢膩は身となり綿絮は脚となると云ひたりし物語あり。されど佛印の語なほ未だ徹せず、などか蝨は綿絮よりも生ぜず垢膩よりも生ぜず、君等が妻の生める兒なるのみと云はざりける。

## 食

酒の肴はたゞ其の趣有らんを賞すべし、強ひて其の味有らんを求むる

には及ばじ。芽獨活、波稜草、筍、瓜、初茸、松茸、松露、海苔、海雲、若布、さや豆、鴨兒芹、枇杷、林檎などの愛すべきはもとより言ふに及ばず、豆腐、豆腐皮、濱納豆、柚味噌の佗びたるも亦酒を下すに足る。たゞに食ふべきもののみならず、左國史漢の文、陶謝李杜の詩も、まことに好き下物ならぬかは。我が邦の中古のならはしに、一とさしの舞を舞ひ、一聯の句を吟じて、以つて酒を侑めたるも、物を尊ばずして志を尊びたる、おもしろしと云ふべし。酒を飲むこと既に奢なり。更に又麟脯豹胎をあさり索むるも、奢に過ぎたり、酒既に甘し、豈更に龍肝鳳髓を要せんや。こちたく肴核を論じ、甚だしく美饌を求むるは、や、俗子の凡情に近くして、實に酒客の高致にあらざるなり。たゞ日常の食膳に至りては、生を養ひ命

を保つ所以のものにかゝる。決して之をおろそかにす可からず。飯は須らく精あるべし、副食は須らく美なるべし。麤食を食ひ、冷水を飲んで日をおくることも、時によりては是非無きことなれども、そは特更に願ふ可きにはあらず。惡衣惡食を慚づるは其の心の陋なること言ふまでもなければ、惡衣を被り惡食をなすが即ち宜しといふにはあらざること、勿論の談なり。養は體を移すといふ語あり。養を取ることに拙くおろそかにして、知らず識らずの間におのれを尪弱羸瘦の身となし、終に疾を得、壽を損して、自ら苦しみ、自ら悶え、常に父母妻子をして憂愁に沈ましむるが如きは、愚の甚だしきものなり。孟子は飲食の人を賤しみたれども、そはおのづから別に意ありてのことにして、飲食のことはおろそかにするも、可なりとなせ



るが如きにあらざるは、飢渴未だ能く飲食の正を得ずと説ける有るに照しても明らかなり。易に鼎の卦を説き、書に鹽梅を稱し、論語の郷黨の篇、禮の内則のくだり、飲食の事を説ける、諄々たり、瑣々たれば、古人の之に輕視せざりしこと測り知るべし。特に食は精を厭はず、膾は細を厭はずといへる、食の體えて餲れたる、魚の餒れて肉の敗れたるは食はず、色の悪きは食はず、臭の悪きは食はず、飪を失へるは食はず、時にあらざるは食はずといへる、割正しからざるは食はず、其の醬を得ざれば食はずといへる、沽酒市脯は食はずといへる、公に祭れば、肉を宿せず、祭肉は三日を出さず、三日を出づれば之を食はずといへる如きは、皆聖人の意を食膳に用ゐること決して麤略ならざるを證す。道を尊び物を卑むの人、やゝも

すれば飲食を蔑視するは非なり。古人に上等の食、中等の居、下等の衣の説あり。衣と居と食との中、食最も身に切なり、意を用ゐざるべからず。たゞ之を談ずる拘々絮々、陳眉公袁隋園李笠翁の如くなるは、其の言ふところ取るべき無きに非ずといへども抑々亦煩瑣厭ふべきのみ。

## 居

千金もて隣を買ふとも云ひ、三遷して里をトすともいへり。居も亦嘉ならざるべからざること論なし。湖沼に沿ひて家するものは多く瘡を患ひ、凹窪に就いて寓するものは多く脚を病むといへり。居も亦意を用ゐざるべからざること論なし。たゞし亭榭の雅、堂閣の壯は、人の之を得んことを欲する、亦實に其の欺かざるの情に出づと雖も、蓋し不急の事に屬す。我

輩無力の徒の如きは、寧ろ數把の草芥くさげ以て雨露うろを防ぎ、幾擔いくたんの泥土どど以て風霜ふうそうを避さぐるを得るを以て、自ら甘あまなはざるべからず。長明兼好ちやうめいけんかうは山林さんりんの人なり、然れども一は方丈ほうじやうの室むろを營いとなみて隨處ずいじよに移動いどうせんことを欲ほし、一は閑情かんじやうの閑筆かんひつ數々しばしば林園りんえん第宅だいたくの事に及いたべり。人の慮りよを居宅きたくに忘わするゝ能よはざるも、自然しぜんに出いづといふべし。たゞ今の都門みやとの内うちは、門々戸々かどかど既に相櫛せつび比鱗ひりん接せつして空隙くうきを餘あまさず。こゝをもて人多おほくは租居そきの便べんに頼たのりて、可よとすれば即すなはち就つき、厭いとければ即すなはち去いり、蟹居かいぎ魚散ぎよさん、定さだまり有あることなし、人と居きとの相待たいつも亦薄またしといふべし。是こゝに於おて家いへを貸かすものは俗しよの所謂いへぬし家主かぬし根性こんじやうを起おこし、屋漏やれもり壁潰かべつぶゆれども、費をを吝をしみて之これを修治しゆぢせず、借かるものは俗しよの所謂いへぬし借屋かや根性こんじやうを起おこし、墻かきは犬いぬの穿うがつに任まかせ、厨くりやは鼠ねずの暴あるゝに委ゆたね、童蒙どうまう無智むちにし

て屏障びやうじやう牀壁しやうへきを汚損おごすれども之これを叱止ちとせず、蛛網ちゆまう猫跡ねこあと到處らうじよに狼藉らうせきたるは世よの通態つうたいなり。二者ふたに共に心術しんじゆつを毀やぶること甚おほし。貸かすもの固かたより是こゝの如ごとくなるべからず、借かるもの亦是こゝの如ごとくなる可べからず、蝸殼くわかく焦巢せうまうの陋ろうといふと雖なも、力の及いたばんほどは明淨みやうじやう清楚せいそならしめて、朝夕あさゆふの心地こころよく住すみなさんことこそ望のぞまほしけれ。』

この章あきに於おては、吾人われの生活しやうかに最たも緊接きんせつなる交渉かうしを有あする衣い、食じき、住す、に就あいて論ろんじて居ゐる。この衣食住いじきぢゆの問題もんだいは誰たれしも考かんがへぬものはあるまい。否いな、實じつに逃のがれ得えない實際じつがい問題もんだいから、否應いやおうなしに考かんがへさせられる問題もんだいである。かういふやうな人間にんげんに緊要きんえうな問題もんだいであるのに、博士はくしの其そのの説とく處ところ、多く一

朝夕の家常茶飯事の上を往來したるものが遺憾である。然し、其の爲めに、却つて、讀む者をして容易に直ちに『御尤も』と首肯させる所に大なる効果を收めてゐるかもしれない。博士のこの説、飽くまでも自己本位に非ざる家族本位乃至社會本位、個人主義に非らざる對他主義であることの爲めに、屢々近代人の生活には觸れ得ない所があるのは止むを得ざることである。然し、『虱は君が妻の生めるのみ。』とか、又『酒の肴は……』『家主根性、借家根性』と、しかも超然とした態度の中に、平氣で云つてゐる所が非常に面白い。博士も亦到底詩人である。

□拂曉。殆ど空うめに使はれてゐるかのやうな一小詩である。が却つて、

斯ういふ處に、別様な博士の面目が躍如としてゐるのが面白い。

苦船の 苦の露 滴る、

初夏の 川のあかつき。

舟舷に 夢を 洗へば、

水面 這ふ 靄の 下より、

花の 香の そと 流れ來て、

掬ふ掌の 漪に ほのめく！

枸杞まじり 技楔まじり、

むらくと 岸に生えたる、

野薔薇 あゝ野薔薇 咲けるが、  
人も見ず 我も見ざりし。

□柳、龍膽花、椿、梅と菊と菅公と、牛の讚、虎の讚、等、趣味の文章である。興湧くまゝの其折々の一氣呵成の短文である。

□閑窓三記。

詩

詩を貪りて讀むは、鄙しけれども、猶さてもありなむ。詩を多く藏むるはきたなくつたなし。時計は二つ三つありても、時は延びることなく、冊子は四つ五つ列ねらるゝとも、心は分たるべくもあらねば、一時は一念、

是念は是境に止まる可し。されば全卷の富に誇りて、日に紙魚を吹かんよりは、一句のおもひきを味はひて、夜半の茶に樂まんには若し。

水仙の一點白し古書齋

書

木佛は焚いて臍をあぶるべし、一切經は尻拭紙と云へり。富むとも書は束ねて置く可らず、貧しくば讀みて後賣るもよからむ。佳き書は賣らるゝとも復人に購はれ讀まる可れば固より着者の本願ならんを、惡き書は物の下貼りともなり果て、業滅のあかつきの却て涼しかるべし。書を賣りて沈に代へ、沈をたいて未讀の書を讀む可し。沈を焚いて讀むに値せぬ書は讀までも有りなんかし、人の命の沈より貴からぬかは、窓外雪靜かにして鐘

の音よど澱み、小室清らに虚しうして燈火寒さが下に、たゞ一卷の書に對むかひたらんこそ心ゆく事なれ。

沈の香の杜詩に泌しみむ夜や雪の聲

## 捨

取ることを知りて、捨つることを知らぬは、大なる過なり。雜草やぶれがほら破瓦やぶれがほらなどを除き捨つれば、庭のおもむきはおのづからに成り、紙片かみきれいとくづ糸屑いとくづなどを掃き捨つれば、家の内はおのづからに整ととのひ、莠はぐさを捨つれば稻いねは肥こえ、蕾つぼみを多く摘み捨つれば、菊の花はいと大きく咲くなり。天地もと人を惱なげまさず、人ことさらに要いなきものを取りて、自ら累かさらはし、自ら苦しむのみ。捨てなむ捨てなむ。烟管きせるも捨つべきなり、酒杯さかづきも捨つべきなり。無くてぞ有る

可よき此等の物を捨つれば、要いなきわづらひははや大方去るなり。おもへば捨つべきものゝ猶なほ多くも有る哉。無くて事缺かかぬほどのものを悉く捨て、袂たもとに風のとゞ清く、心は水のとゞ平らかなるに至らば、人は望のぞもおのづから成りて、徳もおのづから進みつべきあり。さは云へ、さは云へ、捨てかぬることよ。』

この閑窓三記は、詩、書、捨、すべて皆とりどりに快かんきつい感想である。何となく非常に引き付けられて讀んだ。讀後私にかふいふ事を考へた。讀書は吾人の靈の糧かてである、尤もである。然し近代人にしても、眞に讀書をしてゐる者が、果して多いだらうか。世間せけんの多くの讀書家と稱せられる者は、

渴きもせぬのに、無暗に、水でがぶくと口を嗽ぐやうな讀書をしてゐる者が多いではあるまいか。眞實に、渴いて渴き切つて、腹の底まで飲み下してこそ水も貴いのである。

吾々が社會に立つての日常生活に於て、常に、拂つてもはらひ切れぬほど多くの、くだらない煩瑣な小事件に苦しめられてゐる。對世間もしくは對家庭等の吾々の眞生活に何等交渉もないやうな出來事、誠にうるさくて仕方がない。これ等こそ、捨てたいものである。

□春の土。

春風渡れば、花舞ひ鳥歌ひ、春水逝けば、魚躍り蘆芽ぐむ。空行く風、野を分くる水のみかは、土も春こそは美しく心よけれ。夏は卯の花くだしに蚯蚓の這ひまはり、五月雨に土龍の穴の潰え込むなど、よろづ濕つき過ぎて、庭前に心無のお饜の下駄の力の痕も醜く、小路に溝の開きたる名残の汚も見る眼厭はし。青苔深く鎖して、綠蔭水の如きほどは、流石に懐しからぬにはあらねど、やがて水無月の天に祝融いさり立つて、草木を促る火の鞭の威を揮へば、砂は焦げ、礫はほてり、地の皮乾き裂けて、太卜の前に灼かれし靈龜の甲の、なさけ無き相を示すも物憂き限りなり。秋は雨の幾夜に、落葉の山路露けくて、椎茸初茸松茸の生ひ出でたるいと面白く、又は夕陽の臙脂膏ざりて、楓林の下、爛錦の彩を得たるも捨て難けれど、

猶物哀しき雲の寂を受けて、おのづからなる地の色の愁はしく、小草の早  
 萎れて畝道の稍廣まり行くも悲しき望なるに、まして、小園の上の生々の  
 力衰へて朝の冷、夕の冷に静まり勝るを見ては、土の神も鐘の音の胸にこ  
 たえて、霧の香の腹に染む夜は、二合半の諸白など欲しかるべきかと思ひ  
 やらる。霜柱のさかしく立てるも、意氣地無く倒れたるも、或は犬路の鐵  
 凍りに凍れるも、芝生の赭ばみ枯れて、老女のたま〜に白粉を粧へる如  
 き霜の曉も、冬はすべてただ悲しくも悲し。積陰の氣の嚴しく酷うして、  
 玄黙の徳わづかに身を守る大地のありさまは、たとへば聖賢の時を失ひて、  
 幽谷に名を埋め、身を潜めたるを見るが如く、一點の好消息無し。春は此  
 にはうらうへにして、雪間に緑の見えそめしより、陽氣やうやく動ききて、

水垢浮きて流るゝ頃ともなれば、天びつかり地没る鍬の長閑けきに掘り反  
 されて、久方の光に遇ふ鄙の富士のはらゝぎより、奥様のしなやかなる手  
 に把られたる草箒の緩き運に撫でらるゝ都の庭の置土の滑らかなるまで、  
 おのづからの潤ひに土目美しくなりて、和らぎを含める懐しさは、人の情  
 を蒸す。柳の雫、球を墜して、旦の風猶冷ゆる江畔の土は、濡れて安らに、  
 櫻の吹雪、香を敷きて、未下りの日ざし麗らかなる丘の邊の土は温かにし  
 て燥かず、蒲公英かすかに飛ぶ、酒庫の後の明地、黄蝶ひそかに眠る、紺  
 屋干場の原、蓮華草の野、陽炎の磧、いづれか優しみと軟かみとの姿なら  
 ざらん。たゞ楽しく歡ばしきは春の土といふべし。

□雪前雪後。

雨も好し、露もよし、霰も霏も天より降るものの面白からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の天空を蔽ひて風無き寒さに、雀ふくらむ程は兎もあれ角もあれ、そと下す風に連れてちらちらと降り出る始より、檐の玉水日に耀う光長閑に融け盡す終まで、いづれかをかしからざらむ。先づ冬の雪の粉の如く、玉の如く、笹の葉に牙ゆる音立て、檜の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さら／＼と降りたる、見るにも興あり、聞くにもおもしろし。又春の雪の大きく軽らかに降りて、落つると頓て色無き水の昔に返る淡々しさもなつかしく、消ゆる消ゆるも些少は積りて、茅葺の屋根に鹿の子斑の夏の富士を見せ、松梅、樅なんどの梢には、天華俄に落ちかゝるかを疑はし

むるも趣あり。されど降る最中の雪の、見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時のことなり。寒さ甚しからねば雪細かならず、暖かさ未しければ雪は水めかずして、恰も好く且つ大きく且つ軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、其の霏々紛紛として盛に下るに當つては、櫻花の春天に翻るが如く、蘆絮の秋風に漂よぶが如く、一江の野渡には對岸を虚無に封じて、仙境の縹緲をあざむき、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで、蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄へり零つる景色、見る眼もあやに美しき限なり。すべて降る時の眺めには廣きところより狭きところよし。玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障へるものなれば、降りしきる真中は、遠き



は全く見えずして却て狭くなり、近きは聊か霞みて狭きは却つて廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。晴れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡して鏡新に明らかなる空の蒼々と朗らかなるが下に、渣滓鍊り去つて銀曇り無き地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙に開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころ無きだに面白くおもはる。馬をさへ眺むると人の云ひたる旦、朝日の光最花やかなるに、疎林に禽起つて飛んでまた還る、有りふれたる郊外のさまざまがらもよし。西の京は金門銀閣、眞如堂、岡崎、東山、清水皆書とすべし。梅尾、榎尾は見ねば知らぬぞ口惜き。木曾の寐覺の床の、巖は鬼斧に任せて千古冷かに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈徐ろに流るゝ雪の日の凍れる寂

しさに、翠蓋梢重く、壁の簷を頂ける松の村立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなんと、二十年の昔の、今の胸に猶あざやかなり。東の京は、御溝の水おだやかに浮寐の禽の夢も安けく、雪に閑なる大御代の午、また比無くめでたし。山王臺今猶好からんが、溜池の有りし昔、いたづらになつかし。不忍の池一望千頃の景は言はずもあれ、石橋の小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れがたき雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨もさゞめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとか云ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧四方の白、實に武藏野を分きて流るゝ川なりと稱ふべ

し。靱藏の稻荷、首屋の松のあたり、趣無きにあらねど景やうやくに浪びんとす。相生橋の橋長く、中島の鳥小なる、取り出で、言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄杆の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに劃りて、一幅の畫としたる、欣ぶ可く賞すべく、此所をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。』

明治文學界の元老、明治文章史上の泰斗としての博士の文章は既に赫赫として世に知られてゐる。今更、屋上屋を架するに及ばないことである。以上の二文に於て、其清楚、高雅、豊艶なる博士一流の文章を味ふべきである。

私は却つて、此等の美文に接した時、『五重塔』の作者たる博士に、より多くの親しみを持つものである。

#### □日本橋。

御江戸といへば日本橋を云はざること無く、日本橋と云へば御江戸を思はざること無し。八百八町の家並の道の筋は、此の橋の上に聚め束ねられて、五十三次の驛路の馬の鈴も、此の橋の袂より振り出す。双六の骰子の一日の始より、提灯の燭のらふ月の終りまで、木履のかたくり絶ゆること無く、雪駄のちやらつき休む暇無し。百萬石も痲痺も、摩れちがひたる繁昌とは、戯作者のさまり文句にして、一都の太極、兩岸剖分すとは、漢學

者のおつな詞藻なり。御槍の鳥毛霞の空に麗はしく、欄干の葱珠人いきれに露けからんとするは、廣重の圖の筆のあやに見え、押送りの水押川霧を突いて來つて、屋島のどさくさ泰平の曉にあらはるゝは、新場の俠兒が叫びにもしるし。春や東風吹く白壁づくり、東に富商の藏つゞきを見て、夏や西日に御城きらめく、西は千代田の譙樓を仰ぎ、富士を染め抜く秋の天、心も更に淋しからず、たゞ頼もしく雄姿を眺めて、朔風に雪の吹る冬の日も、人往き車往き、馬往きて更に已まねば、空に瓊花の飛ぶを許して、地に玉屑の積む間あらせぬ熱閑の熱は烘爐をあざむきて、まことに殷々として盛んなる大都の橋たるを視す。車輪の三十輻は一轂を共にし、扇子の九本骨も一つ蟹目に集る、千住よりするもの、品川よりするもの、六十四州

の民、此の橋の塵を踏んで、始めて江戸の土に草鞋を載せたるを思ひ、唐よりするもの、天竺よりするもの、萬國の客、此の橋の埃を浴びて、始めて日本の香を征衣の袖に留めたるを感ず。日本橋とは名づけ得たる哉、日本橋とは名づけ得たる哉。

(明治四十四年四月東京日本橋の成るに際し紀念誌編者の囑により江戸日本橋の記を作る、新を得て舊を偲ぶのみ。)

□渡舟。

八百八町に下駄の音の絶ゆる間無く、二十四時を車の轟き已むこと無ければ、十丈の紅塵馬耳を没して、都は人の息つくところだに無きやうなる

を、幸一條の長水北より南へと注いで、納新吐故の作用を爲せば、江戸は辛くも隅田川に活くと云ふべく、此の流の上のみぞ纔に埃無く風清き。されば朝三暮四の營に心忙しく、蠅頭蝸角の利に魂そゞろぐ市人も、此の川面に出でたる折は、身をばひろびろとしたる天日の下に曬すまゝ、胸にも肆辱のいざこざを忘れて、少時は水光雲容に目を洗ひ神を暢ぶるなるべきにや。左しも無き人々すら渡船をばをかきものに云ひ做すが多し。實に虹梁空に懸る橋の上の眺望も悪きにはあらねども、人も行けば我も行き袖も觸れば肩も觸るに、猶萬の氣遣はしさと煩しさと有るべし。渡船の中は、よしや櫓には春江の漲りを受けて、船長の腕しきりに疲るゝとも乗客は人も休めば我も休み、腰も卸せば荷物も卸して、所謂同船の客の心温き火

種の取遣り、煙草の烟を長閑に吹きても居らるべければ、一としほ思を緩べ景を賞するには適せん。およそ隅田川の渡十數所、一長一短ありといへどもとりくに眺望よし。最も川下のをかちどきの渡といふ。月島より築地への渡なり。海近く望濶く、南風颯として到る夏の夕の快さ、舷に浪の飛沫立つるもおもしろし。其の上のを月島の渡とす。同じく月島より明石町への渡なるが、此處のは竹篙檣櫓の昔の式ならで、官設無賃の蒸汽船の渡なれば、他所のとは趣異りて、たゞ其の速やかなるををかしとすべく、畫致と詩趣とは問ひ難きことながら川上おろし氷より冷く、霏一としきり玄雲を零れて落つる日など、煙突の強き色を吐き、機關の緊しき音を立つるも却つて面白し。佃の渡はおのづから物古りたり。鐵砲洲の方より打ち

渡るに、何となく鄙ひなびたる里へさすらふる様なる心地するも、我一人の思ひ做しにはあらじ。愁しゅう雲天を鎖とぎして寒雨かんう夕に濺しぐ秋の暮など、一葦東に渡る、まことに心寂しやくびたり。月の夜親船の影黒く橋高はしきを望むも亦淋しき晝なり。勝かつ関の渡より佃の渡まで、三の渡は皆本濤ほんみよを渡すなり。隅田川の下流に係ると雖も、海逼せまり、潮激しほげしければ、海氣かいきありて野趣なし。川渡とは一つに言ひ難し。相川町の渡、今は絶たえたるならん。蠣殻かきがら町より仙臺堀へ渡る中洲の渡は市中しちゆうなれば取り出で、言ふ可きこと無し。寒さ猶残れりとのみ思ひ居たる町の人の、たま〜此の渡に乗りて、川上川下の打霞うちかすめるを見つゝ竊ひそかに春の來りぬるを悟さとるなどや此所の風情ふうせいなるべき。濱町より安宅あたくへの安宅の渡、矢の倉の市場前より一つ目への千歳ちとせの渡、別に甲乙も

無なき風情ふうせいながら、時雨に澁蛇しぶじゆ目傘、春雨に花屋の荷、このあたりは乗る人のさまによりて見處みどころも出づべく。船よりの眺は雪の日などこそあれ。富士見の渡は須賀町より横網へと行くに、若葉わかば時の夕陽ゆうひやはらかなる頃など、本所側がはすべてよし。ふりかへり見れば、雲間くもまに高く玉を展のべ銀を磨ひきて芙蓉ふよう玲瓏れいろうたる富士の遠く聳そびえたる、何とも云へず神々しく尊し。特に西風吹きつゞきて世の中やうやく枯からび行く暮秋の夕、日輪既に沈みて餘光猶天を燦やきて紅なる空に、黒くして蒼く、蒼くして紫なる、幽玄神秘の色に無限の威を韜たうみつゝ挺然として其の雄姿を嚴かに示せるを仰あやぎたる、胸冷ゆるやうの心地して二なく尊し。駒形の渡は、汀みぎは近く觀音堂の小こやかなる白壁づくりして、形かたばかりの寶珠を頂ける形も憎にくみならず。雨に郭公かくこうの一と聲も

聞かまほしき處なるが、今は絶えたりや久しく船の往來をば見ず。君は今  
 の句も渡無くなりて揚場の其處とも知られずなりては人やうやく其趣を得  
 解かざるに至らん。淺草寺裏門河岸より枕橋に至る渡は、東側より眺めて、  
 春は山門五重塔の霞めるを見る、秋冬は水上遠く筑波を想ひやる、皆好し。  
 西側より夏の夜の涼しきに、酒亭の燈を望みたる、春の午に長堤の花の、  
 紅雲地に曳けるが如くなるを見たる、此も好し。竹屋の渡こそ未だ見ぬ人  
 も繪に歌に知れ。江戸側より見たる長堤の一望は花の時のみかは、若葉の  
 朝風に撓ひ、痴鴉の實櫻に啼くころもをかしく、葉落ち梢透きて缺月堤の  
 陰より青み昇る秋もをかしく、田舎側より見たる待乳山の疎林梵宮、三谷  
 堀の斜水小橋、淺草寺の堂塔、富士の連山、春は紫に沈める筑波根、いつ

れかをかしからざらむ。特に冬より春かけて、沖に南風の荒く吹く日は、  
 海鷗の遠くこのあたりに入り来て、憂き事知らぬげに遊び泛べる、胸に櫻  
 を分けて行くといへる句も思ひ出されて、柳の煙り白魚の上る頃は特にめ  
 でたく長閑し。よし鳥の名に業平の物思ひしたるは此處ならずとも、二挺  
 立に一蝶の浮かれたるは其處なるべきにや。茂睡の歌の碑は遠望の眸に入  
 らずとも、其角の句の社は華表の半を現はせるものをかし。竹屋の上は寺  
 島の渡、寺島の上は橋場の渡なり。野趣漸く多くして、東岸の蘆菔に割葦  
 の聲しげく、上游愈々開けて、坎位の水平に筑波の影鮮やかなるは寺島の  
 渡の勝。石濱の祠畔に老樹の鬱たるを望み、小松島の園地に水禽の俄に立  
 つを聞くは橋場の渡の風情。共に多くを言ふに値せず、汐入の渡は河水の

勾曲するところに當れり。村は猶古朴のおもかげを存して民僅に灰を造り田を耕すに過ぎねば、竹籬茅屋、船の着くあたりの態は、吳春などの繪の如くなりしが、今は漸く變ぜんとするに至れり。東岸の綾瀬浮島あたり、水濶く境開けて月を賞するに好し。汐入より以上、元木の渡あり、元木より下尾久に至る。小臺の渡あり、小臺より上元木に至る。曰く羅漢渡、曰く矢新田の渡、下村煉瓦屋渡、曰く川口の渡、皆多少の好處ありと雖も、市を距る遠ければ語らず。

□江戸の遊女。

江戸の遊女はしばしば浄瑠璃小説の題材とせられて、人皆其の意氣地あ

りて寛濶に、且つ或は風雅に或は無邪氣に、いとをかしかりしものとは知れど、それはおよそを推測りての談なり。江戸と云ひても、師宣の描きし頃の遊女と、歌麿の寫しし頃の遊女と、降りて幕末頃の遊女とは、其衣服裝飾のいたく異なる如く、其の感情趣味もまたいたく移り代りて異なるは明らかなれば、おしなべて一口には云ひ難きなり。天明の頃の吉原の遊女は其の前にも其の後にも勝りたるかとおぼしく、遊客もまた其の上れる際には、まことに其の前の時、後の世よりは勝れたるがおほかりしやうなり。十八大通などと事々しく云ひ嘖されし浮かれ男どもの、燈火華やかなる夕々を廊に通ひて、奢侈の精髓と、所謂大通の面自とを發揮せんことを力めたる頃の遊女等は、また之に應じて其等の客に接するに堪ふべきほ

どの素を具へ才を養はんとはせしなるべし。遊女と云へば、一概に士君子の談に上すべきにもあらぬ卑しき者と看做すもあるべけれど、當時の遊女の錚々たる者は、幼時より深窓に成長して、各般の學藝遊技を學び、今の所謂最高等教育を受けたるものにして、普通士人の家の愛嬢などに優るとも劣らざる待遇を身に負ひて人となれるものなり。されば「古契三娼」などを見れば、或女は源氏物語の抄書を纂め、或女は俳諧の宗匠の如くに人の俳句の撰評をなし、或女は歌を嗜めりといふごとき事實の少からず記されたるを見る。又今現に稀に存する扇屋の名技花扇の絹本紙本等に遺せる筆の跡などを見るに、東江源鱗の筆意を殆んど善く模して其壘を摩し居り、行體草體の如きは、王羲之風に美はしく書けること、中々男も及び難きほどにて、此の如き文字をもて艷書を送られんには、返書を認め得べき鬚眉の男子よく幾人か有らんと思ふまでなり。五ッ衣を着するともはづかしからずといふ評を得たる女なれば、品位もあり、美麗にもありしこと言ふまでも無かりしならんが、模倣といへばそれまでなれど實に其の書を見る時は、その豊艷のおもかげのそゞろになつかしきまでにて、篠の葉の風に散りしやうの今の女の筆の痕を見ては、昨日の心なづみの今日は疾く醒むるに比ぶべくもあらず。たゞ和歌をよみしといふにはあらで、歌學のたしなみもありしといふに、おかど(花扇の實名)の人となりと思ひて其薄倖をあらはれまざばあらず。同じ頃の鶴屋の菅原は花扇とは正反對にて、氣象崢嶸、眼に萬金を空しうして、情に一時に激す。所謂江戸の女にして、權貴に屈

どにて、此の如き文字をもて艷書を送られんには、返書を認め得べき鬚眉の男子よく幾人か有らんと思ふまでなり。五ッ衣を着するともはづかしからずといふ評を得たる女なれば、品位もあり、美麗にもありしこと言ふまでも無かりしならんが、模倣といへばそれまでなれど實に其の書を見る時は、その豊艷のおもかげのそゞろになつかしきまでにて、篠の葉の風に散りしやうの今の女の筆の痕を見ては、昨日の心なづみの今日は疾く醒むるに比ぶべくもあらず。たゞ和歌をよみしといふにはあらで、歌學のたしなみもありしといふに、おかど(花扇の實名)の人となりと思ひて其薄倖をあらはれまざばあらず。同じ頃の鶴屋の菅原は花扇とは正反對にて、氣象崢嶸、眼に萬金を空しうして、情に一時に激す。所謂江戸の女にして、權貴に屈



せず、弱者を扶くるに名あり。輕薄利口の幫間を愛せずして、酒間の伴客にも力士を好みしといふが如き、柔弱半可のいやみを嫌ひて、宗旨も法華の剛強を悦びしといふが如き、凜々たる意氣は其の清らに麗はしかりし容貌を助けて、仲の町の道中姿、たゞ此の人と松葉屋の松人とを推して三千人の第一となせりといふが如き、瀬川や小紫や丁山や名山や、美人は雲の如く集まりし當時に於て、如何に水際立ちて群を抜きしかを知るに足る。梅枝と俳名を呼びて、一方の好者の間に點者の位地を占めしことは、京傳の文に散見す。容貌の美を以て鳴れる玉屋の濃紫は、外温にして内の心高く、歌は萬葉を愛し、書は東江を學びしといふ。其の眞蹟を目にしたること無ければ、花扇に比して長短優劣の如何を知らずと雖も、蓋しまた必ら

ずしも其の下に在らざらむ。書をよくし、茶を解し、香を知り、俳諧に拙からず、揚弓にさへ精しかりしといふに、玉堂の中、華氈の上、一朶の牡丹、玉言はんとする麗人の、紫壇の弓の黄金の肥を把つて、春葱白く織き美しき指の間に、白羽に藍文おもしろう染めたる小箭を摘んで、星眼軽く輝いて的を望んだる風情、彼の歌麿が飽くまで艶に描きたる圖の今に存するおもかげもしのばる。遊女とし云へば、髻高う挿頭多く、下手の描きし千手觀音のやうなる頭したるが多かりし時に、此の女の獨洗ひ髪を好みしといふにも、心の中の匂の清々しさの思はる。將棋を善くせしといふこと雜書に散見して、某甲某乙の負けしといふ噂などの小冊に残れるは、おもふに生天狗の男の人に憎まれたるが、たまたま此の女にあひて屈したる事

實の當時の談柄となりたるにやありけん。蓋惡戰死闘の才は缺けたるにしも、陣法整ひて亂れざる品佳き將棋をばさしたるなるべし。丁字屋の雛鶴の氣品高くして、流行語の卑しきを嫌ひ、おのれはもとよりのこと、附從ふ新造禿にも決して流行言葉の蓮葉なるを用ゐしめず、路花墻柳の悲しき身にありながら、言語動作のすべて敦厚正誠ならんこと欲したる、其の底の心もまた憐むべし。同じ家の丁山の磊々落落々として、吾が心の欲するところに従ひ、物にかまはず、財をものゝかずともせず、丁山の氣位は不二も其の高さを譲ると云はれし其の人柄容儀いかゞなりけむ。河東を好みて善くせしと聞けば、此の女に、すゑてやるのは恩ならでなどいふ一トくさりを吟ぜられては、聞くものゝ骨も魂も其の灸の火に焼き盡されたるべ

しや。文章を以て名ありしは扇屋の扇野、後朝の別のあと、待宵の更けての恨、知らず如何なる文を作りしを。歌三絃に名ありしは丁字屋の錦戸、緑酒の光たゞよひ、紅燭の涙流れたる席、そもく如何なる絲聲肉聲をや起し。大菱屋の象瀉の手取りと云はれたるは、其の心の曲におもしろき廉の多かりしにや。古筆を好み、短曲を愛し、當時に大に行はれたる長羽織をさらひしといふに、一ト癖ありて時代に雷同せざるほども見ゆ。松葉屋の瀬川は三浦屋の高尾の如くに、數代連綿たる名なれば、其の何代目の瀬川が最も優りしかは詳しくしがたけれど、金魚が小冊、雲鼓(歟)が笑話などにも其の噂は高く、人に師たるに足りし藝の十有餘ありしといふに、普通ならぬ稟賦の高さ、おしはかり知らる。凡そ此の頃の文學も音曲も演

劇も繪畫(浮世繪一科にはあれど)も交際も、遊廓を中心とせる傾向の明らかなるは、此等の遊君等の五丁町に燦々として、衆星光を揚げ輝きを争ひしに本づくとも云ふ可く、遊女をもてみだりにおとしめ卑まんとするとも、百年を経て猶其の餘光流彩の今に盡きざるにかんがみて、漫に之をおとしみ難さを知るべし。

□天明の紳士。

昨日の流行は今日の時勢後れなれど、大晦日の後には元旦の來る如く、お婆様の葛籠の中の古風物の色氣が、案のほかに當世の走りになつて撃つて出づることも有るらむなれば、いつそ大古びに古びたるところは却つて

新らしからんと、試みに、

百三十年ほど前の好男子の衣服を見れば、

羽織はずつと長く、紐も夏などは利久の細く長き、ぼたんがけなど用ゐるも苦しからねど、あなたの幅ひろのさなだ打、ぼたんがけも左様短うては見るに似しい。やつぱり紐は黒糸打さ。小袖ももう無垢の類、郡内縞は決して御無用、その御小袖もちと綿が厚い、袖口もずつと細く、ゆきはもう一寸長く、紋所も細りにして、もちつと小さく、しかし御襦袢は五分長だね、それもやつぱり半袖さ。

と、當世風を指南する人の、武士に對つて教ふるところ、安永七年の板本に見えれば、當時の武士としては、

無垢むくの類の小袖こそでの、薄綿うすわたの、袖口細く、ゆき長めなるを着たるがよく、羽織はおりは長くして、紐ひもは黒などを用ゐたるを佳なりとしたりと見ゆ。

おなじ書に、町家の息子むすこの衣を論じて、

たけは七寸五分では短いみじか、左様くるぶしが見えては不可いかに。そして一寸ぶきだの、たけをもう二寸五分伸ばして、ふきは五分にさつしやい。襟えりたけがとんだ長い、それも二尺一寸ぐらゐさ、扱まてゆきは八寸に袖は三寸五分、袖口八寸と仕度しどい。羽織はおりの仕立は前で七寸、後で五寸。勿論もちろん人の丈にもよるが、これは中丈の寸でござる。帯は狭せまいも見にくいみづかいが、またさう濶ひろくては何様も鄙いやしい。そしてまがひ博多はかたださうだ、たとへ眞の博多でも、今はけちな野郎やろうまでが締しめるから、もう博多もなりにくい。(中略)着物は

何でも上着は黒くろさ。常着には雅みやな縞しまや、小紋こもんなどもよけれど、何様どなたも黒ほどには人が見えぬ。下着は白縞しろしま交りの黒出八丈くろで、中着は新形のこもんの類、羽織も黒か黒くろ鳶とびか、また羽二重はふたへのいきな小紋こもんさ。紐ひもは細いはいかぬによ、それもささぎで一寸結ちよつとび、アノ五丁紐ひもがいつち雅みやだ。

とあり。此の語の中、全く時代違ちがひなれば、今には不向ふむきの事のみ多けれど、帯の濶ひろさを鄙いやしむといへるは甚だ當れり。男帯の幅濶はつひろに過ぎたるは、何となく帯を見て呉くれといふやうに見えて厭いとはしいといふ人今も少からず。又羽織はおりの黒くろ鳶とびなどは今は用ゐられざれど、着物の色合によりては案外あんぐわいに純黒まっくろよりも暖味ぬるみを帯べる黒くろ鳶とびの方映うつりて宜よろき事こともあらんか。

それより十年ほど後れて、

天明七年頃の息子株の好男子の衣服として、有名なる京傳の記せるを見るに、

黄の無地八丈に、けんぼうにて、とめがたの小紋を置いた上着、三ッ對に縞廣東の下着、紺縮緬のらせん絞りの襦袢、下着は皆黒七子の裏襟、花色縮緬の裾廻し、胴裏は白羽二重、身はゞ廣き仕立、

裕羽織、黒の無地八丈、前下り長き仕立、五丁紐もあやまるとかいつて、黒の平打のちよん掛。帯はお納戸茶緞子の小模様。

とあり。前に擧げたる五丁紐の避けられたるもをかし。胴裏を白羽二重とまで記したるは、作者が餘程如是書きたく思ひしなるべしとおもしろし。ゑり川屋の煙草入、田町のかたばみや久兵衛の刺繡などいふ事は、此頃

のものにやゝもすれば見ゆるなり。

これより三年前、即ち天明五年の板本に、同じ作者は好男子の衣裳につき論じて、

黒縮緬の小袖、黒上田の羽織、(今の老人などのいふ上田と天明頃の上田とは異へるにや)八丈の下着などなり。少しそげて來ては琉球紬の小袖、かんとら縞の下着、女郎の方より送りし仕着小袖に案じの小紋の縁取り無垢、縮緬の鳴海絞りの裕襦袢などいふ出もあり。

と記し、同八年の同じ人の著には、

黒縮緬の小袖に黒丹後の羽織、かた手に裾を摘んで、しさせ小袖に島津あられのへりとり無垢を見せかけ。

と一人を記し、またそれより少し品格の下れるをば、

結城縞の小袖に同じ羽織、花色縮緬のばつち、ぶつかぶり頭巾の上から芳原の餅つきの手拭を被り。

と記しあり。同九年の板の振鷺亭の小説には、また息子株の好男子を叙して、

黒羽二重の身幅の廣き上着、三ツつゐにかんとう縞の下着、黒上田の裕羽織、前さがり程よく、焦茶に少し金のこぼれ梅のある壁ちよろの帯、せまからず廣からず云々

とあり。これらを合せ考ふれば、天明度の若き男の好尚もほよそ知るべし。但し金のこぼれ梅の壁ちよろの帯といへるは、實物を知らざれば、百

年餘りも後に生れたる我等には善惡を云ひがたく思はるなり。

百十四年前、寛政二年の同じ作者が作の中の若き男の着つけには、

くわがへし小紋の龍紋の上着、三ツ對に牡丹餅絞の袴袴、白毛どろめんの裕羽織に、去る新造の藏の壁の如くむだ書を仕た白七子の胴裏、焦茶無地壁ちよろの帯とあり。同年の京傳の作中の、衣裳づけ萬事の好み五分も隙いたところなしと、作者が殊に記し置ける通人の（實は眞の通ならぬ）衣服は、

黒の唐縮緬の小袖（メリンスにはあらず、支那産縮緬の事なり）本八の下着、二ツ對。白羽二重になをり紅絹の裏つけた袴袴。黒の壁ちよろに身代よりまづ先へ崩し始めの紋所、うしろ三所に星縫に仕た裕羽織、もつと

も前下りの端を少し折込みし仕立。御納戸茶のごろふくりんの帯、云々。とあり。天明より寛政に移りては、同じやうなる中におのづから、また變れるを見るべし。此の他猶かゝる類を擧げんには數限りも無さに近けれど、おほよそは同じおもひきなれば、左のみはとて洩したり。見る人前に掲げたるにはあらましを推測りて、今に比べて見んには少からぬをかしみをおぼゆるなるべし。

博士の深奥なる文學的研究は、主として徳川時代文學にかゝることは誰しも既に知つてゐる所である。所謂江戸文學の驚くべき造詣より來れる、江戸研究、乃至江戸趣味の生み出したもの、前に擧げた三篇は、實に世の

江戸趣味讚美者、研究者の隨喜措く能はざるものある。

□尺牘說。

書簡は意を達するのみにして足る。而も意を達するのみにして足らざる有り。譬へば花の美すなはち足るが如し、而もたゞ美すなはち足らざる有り、若し夫れ芬烈の香あり、微妙殊勝の香あれば、人愈々これを悦ぶ。美にして香無きを以て、美にして香あるに比すれば、美にして香無きはもとより足らざる有る也。たゞ美すなはち足る。而もたゞ美即足らざるありといふもの、是これを道ふ也。

書簡はもと意を達せんと慾するに出づ。意を達するを能くす、すなはち

足るのみ。而も能く意を達す、猶足らざる有らんとす。予古の佳章を見るに、名花の多く奇香有るが如きを覺ゆ。書簡も文の一體なるのみ、文豈意を達するのみにして而して足らんや、文の能くし難きや久し、書簡の能くし難きも亦久しい哉。

尺牘は能く盡すを以て佳となし、至つて簡なるを以て巧となし、趣有るを以て妙となす。能く盡して、而して至つて簡、而して趣有る、此を最上乘と爲す。語多くして意を盡さず、辭繁にして簡なるを得ず、文飾つて趣を成す無き、此を三短となす。三短有つて一長無き、これを最悪となす。予の如きは毎に不悪の文、猶之を爲すを得ず。尺牘の文を談ずる能はざる

や久矣。

□作文の境。

おのれの文を讀みて、真に其拙陋厭ふ可く悲むべきを感ずるものは幸なり。蓋し自ら省みて真に其の拙陋厭ふべく悲むべきを感ずる時は、其の人の文を作るの手は未だ進まずといふといへども、其の人の文を看るの眼は既に進めるあるを以てなり。眼進めば、手もまた漸く進むべし。日に自ら視て足らずとするものは、其の文日に漸く進む。

他人の文を讀みて、其の拙陋笑ふべく厭ふべきを感ずるものは不幸なり。



人を目して卑しとするものは、自ら視て高しとするの情あるなり。人を目して小なりとするものは、自ら視て大なりとするの情あるなり。人を論じて拙なりとするものは、自ら視て巧なりとするの情あるなり。人の文を論じて蕪穢なりとするものは、自ら視て精鍊なりとするの情あるなり。およそ自ら視て自ら足れりとするの情あれば、其の人の眼は漸くに止まつて漸くに進まず、其の人の手もまた漸くに進まざるに至るべし。日に自ら視て足れりとするものは、其の文日に漸く退かむ。

文を學び文を論ずるもの、やゝもすれば人の文の短處病處を指斥す。其の言當れりとするも、其の事に於けるや寸益無し。如かず人の文の長所を

看得て、而して之を學び得んには。

人の文の短處病處を指彈するも、我が文に益なし。如かず我が文の短處病處を省みて之を改め之を補はんには。

自ら視て大なりとするものは、日に漸く其の大を失ひ、自ら視て小なりとするものは、日に漸く小ならざらんとす。自ら視て高しとするものは、日に漸く其の高を失ひ、自ら視て其の卑しとするものは、日に漸く卑しからざらんとす。自ら視て足れりとするものは、日に漸く損し、自ら視て足らずとするものは、日に漸く加はるあらんとす。獨り文の道のみ然るにあ

らざるなり。』

文章界の耆宿としての博士の文章に關する論は惜しい哉この二短章に止つてゐる。然しこれ、文章に志すものゝ金科玉條である。

何等の奇拔な説なく、また何等の新味がなしといへども、圓滿にして穩健なる所説は、誠に堂々として動すべからざる卓見であつて深く傾聽すべきところである。

□筆と病。

醫療の道と源氏物語と

奈良朝以前より既に醫療の道やうやく開けたるは言ふまでも無く、藥劑

と技術とを以て人の疾病にむかひて對治の法を講じたりしは其跡いと明らかなり。されど醫事の文學にあらはれたるは猶少し。降りて平安朝に至りても、歴史を讀みて世を觀れば、醫療の道の愈行はれたるを知るべけれども、文學を透して時を視へば、厭勝禁呪の法の却て盛なるを見るべし。源氏物語の中に籠れる當時の人の疾病に對する思想を考ふるに、疾病はすべて他人の怨恨、若しくは寄るところ無き鬼物の憑着、若しくは神佛の冥裏の呵責より來るものとなせるが如し。巫覡僧尼の徒の、病界に於ける司權者の位地を占めたるも宜なりといふべし。蠱術を能くするものゝ左道によりて人を病斃せしむるを得、と信ぜられたるも、奈良朝の時のみ然るにあらず、延いて徳川氏の代に至つて猶其の餘威を有せり。されば我が國の古き

物語には、精神療法の記事多くして、醫學療法の記事少しといふも、甚しき失望の言にはあらず。

### 醫師と落久保物語と

醫師も亦古き物語に見えざるにはあらず。落久保の中の典藥頭の如きは、老いて色を好める滑稽漢として、をかしく描き出され居れり。徳川氏の末に當りて、曲亭馬琴、其の著皿々郷談中にこれを藍本として、神を存し態を換へて用ゐたり。庸醫の滑稽材料たるはおのづからなる數なるが、支那の戯曲小説には特に多く用ゐられ、元時代の雜劇には所謂庸醫の出づること多く、小説にも金瓶梅に衆醫の難症の患者をいぢりまはすところなど、

特にをかしく描きあり。又同じ書に美人の病を癒したる徳によりて幸に其の夫たるを得し醫の、終に強者に驅逐せらるゝに至る段なども、有るべきさまに巧みに描き居れり。落久保物語此等の先だつこと遠く、ことに老醫の美人を得んとして寒夜彷徨せる結果、下痢を起すに至れるを叙せる如き、醫理も少しは窺ひ知れる人の作るところかと見えてをかし。

### 神 醫

醫の術たけて道精しきを、よろしき方に描きなしたるには、水滸傳の安道全を寫せるありて、人の知るところなり。後に至りて水滸傳を續きて書ける蕩寇志に、安道全色を貪りて病を得、庸醫の爲にあやまれて、且つ怒

り且つ覺りつゝ死するを描ける、蕩寇志は拙作ながら、其の一段のみ先はおもしろし。

### 麻 疹

はしかは喉のいらつきてハシカきよりの名なりといふこと普通の説なれど、般戸迦といふ鬼の爲すわざの病なれば、ハシカといふといふ説も、當否は知らず古くより傳へたることなり。式亭三馬の作とおぼえたり、麻疹戲言一卷あり。小冊なりといへども、専ら一病の書に就いて記したるもの、稀なる著述といふべく、又以て如何ばかりか麻疹の其頃廣く行はれしかを知るべし。麻疹は徳川氏の時に當りて、折々激しく行はれしと見え、多く

浮世繪を見る時には、やゝもすれば、はしかを人に擬らへて畫き、各種の職業の人々の、或は之を打ち撲き、或はそを支へ宿むるさまを畫ける戲畫などを見受く。大抵一枚ずりにて、よき畫工のものしたるは無けれども、畫によりてはハシカの禁忌をば間接に知るべし。すなはち娼妓、酒屋、魚屋などは、ハシカを憎み打つものとして描かれれば、此等の徒の麻疹の爲に大なる不幸に遭遇し、怨嗟困難せるを察知すべきなり。

### 痘 瘡

痘神のことは古くより戲文俗説に見ゆ。降りて馬琴の弓張月には、爲朝御宿と書きたる札を貼りて痘神の入るを防ぐといふ俗傳より、爲朝痘神を

叱退するの記事あり。八丈島大島などの海中の離れ島には由縁無くて痘の傳はること無く有りしより、云ひ出したることにやあらん。八丈島は借字なり。八郎を八チャウといふやうに發音するより、八郎島の八丈島となりしにて、八丈島は本邦に痘の渡りて後も、長く犯さるゝこと無く有りしなるべし。サ、ラ三八郎と鎮西八郎と關係ありや無しやは知らねど、三八郎宿の貼札もまた痘神をして戸に入らざらしむといふ俗傳あり。山東京傳の稻妻表紙に、其記事見えたり。京傳馬琴相續きて痘神の事を書けるもをかし。痘大に行はれたるよりの事なるべし。

### 吸出し膏藥

吸出し膏藥の機能を誇張して、一場のをかしまを演ぜしめたるは、はやく狂言に見えたりとおぼえしが、竹齋物語の中にもまたいとをかしき一章あり。竹齋物語は膝栗毛と伊勢物語との中間に位して、痴談と狂歌とを糺り交ぜたる。ほとんど膝栗毛系統の書の先人といふべく、古朴無邪氣にしてをかしきものなるが、主人公竹齋はすなはち一庸醫なり。痴談數あるが中にいとをかしきは、井に入りたる人を救はんとて戸板に吸出し膏藥を貼りて井の上に伏せ置きたりといふ一段なり。西遊記中の、葫蘆中に天を装すといふ談の如く奇想まことに天外より來るといふべし。今の人のかけても思ひ及ぶべきにあらず、思ひきつて理窟葛藤を離れたる、古人の面目、躍如として見えておもしろし。

## 文人詞客と醫學上の知識

近松巢林は岡本一抱の同胞なり。一抱は醫にして本草にも明るく、和語本草の著あり。されば巢林子の著はすところの淨るりの中、間々本草の知識あることの現はれ居るを見る。一例をあぐれば博多小女郎の曲の中に、唐物藥品を記せる條のごとし。芭蕉は本間道悦に醫を學び、其角は醫士の子ともいふべし、木節は二人よりも詩才こそ劣れ、醫技は長けたるなるべし。雨月物語の著者の上田秋成は醫をも業としたるが、其の著はすところのものの中に、言おのづから醫道にわたれるあり。伊丹鬼貫は導引の術を得たるなり。森羅萬象は名醫桂川甫周の三族、曲亭馬琴は醫をも學びたる

が、其子宗伯は肺病にて蚤く死したれど、全く醫をも業としたるなり。馬琴の著書中、談の醫藥の事に及べるもの甚だ多し。俠客傳の龍涎香、美少年録の枸神、八犬傳の木蓼の類、普通の作者の千篇一律、人參と眞珠とのみを用ゐて一場の談をなせるには遙かに異なり。三馬は實際の世相を寫すを主としたれば醫學の知識ありといふほどにはあらざるべけれど、言多く醫の事と病の事とに渉るあり、時に吉益一流の古方家の末輩の峻劑を用ゐて人をあやまることあるを刺りたることなどもありしとおぼえたり。其の日記の中に醫學入門の拔萃をなし居れるを見れば、賣藥調製の案となさんと欲したるが爲なるかは知らねど、俗書の醫方なんどもも覗へるは知るべし。やぶ鑑一系統の書は餘り多く見ざれども、若し三馬をして其の流を汲

みて筆を専にせしめんには、最も興あるものを世に遺しゝならん。西鶴は牛膝とゐのこづちとを列べ書きたりとして、無識なりとは罵られたれど、全く醫學を窺はずとは評し難き節あり。風來は本來本草家なれば、醫技に智の及びたるは疑ふべからず。たゞ一九春水は多く書を読まずとおぼしければ論ずるに足らざるなり。

#### 文學に多く現はれたる病

文學に多く現はれたる病の中、眼病は眞珠といふ高價の劑を要する爲に、數々凡庸作者の合巻類に用ゐられぬ。とり眼は復讎譚の返り討に適當なるため用ゐられ、孝子非人となりて營良不良のために愚かなる眼病を致し、

終に兇惡の敵の毒刃に殪るゝなど、酸鼻の談人をして不快を感ぜしむ。大安寺の譚の類も合巻には多く用ゐらる。内障眼は藤掛道十郎のほか多からぬやうなれど、全くの盲目の復明する朝顔日記、壺坂寺の類は、奇に過ぎながら少からず。人參を要する病氣は肺癆なりや否や不明なれども、單に大病として數々凡作にあらはる。癩病は峻徳丸、勝五郎等、戯曲小説に少からず用ゐらる。支那小説に、美人と婚を約せる男の、癩を發して大に人の厭ふところとなるに及び、我が病の故を以て花の如き美人を妻として苦ましむるを欲せず、自から約を破り、女をして他に歸するの自由を得しめんとす。然るに美人貞烈其の約婚の人の世の惡むところの病を得たるを棄つるを義ならずとし、誓つて他に歸するを肯んぜず、ここに於て病者自か

この筆と病は、全く興味ある有益な研究である。醫學と文藝とは由來離るべからざる密接な關係を有してゐる。西洋の文藝に於ける醫學と文學との研究は屢々種々の人に因つて爲されてゐるけれども、日本文學に於ては甚だ稀であつた。故に博士のこの研究は實に有難い貴いものである。

現はるれど、シヤウジヤウ 症狀明らかならず。マラリヤは京傳の山崎の宗鑑を寫せるに現はれ、たま／＼其地方アノフェレス多くして病窟といふべきに、シヤウジツ 寫實の功名は見えなれど他の書には多からず。心臟病、ガンシヨ 癌腫、シチヤウチウ 十二指腸蟲、セキゾウ 脊髓病等も稀に、司馬相如、源實朝等は糖尿トウニウビヤウ 病なるべけれど、シンチンダイシヤ 新陳代謝病の如きは殆ど現はれず。文藝に最も多きは狂疾キヤウシツ なるべし。

ら死して美人の爲めに其の道義の霸絆ダウギ を脱せしめんと欲し、毒ドク を仰いで死せんとするに、毒却ドクケツ つて藥となりて難病ナンビヤウ 忽トウ に癒え、二人相悦んで終生の夫妻さい となるの談あり。其の服せるものは砒石ヒセキ なりといふに至つては、近時砒ヒ を用ゐて癩ちん を治するの方も、甚だ古きを感じざるを得ず。人面瘡ヒンメンソウ は實存の病なりや否やを知らざるも、神稻水滸傳のみならず現はる。梅毒ばいどく は惡人淫婦の末路に多く、膈かく の病は甚だ稀に見ゆ。ヒステリー、難産なんさん は恠談くわいたん を生み、癩癩てんくわん、ろくろくび 轆轤首は滑稽こつげい に用ゐらる、かげの病は元の時の倩女離魂せんぢよりこん の曲より以來未だ嘗て見ざる病なれども亦多く現はる。すべて古の戯曲小説類には奇病稀病多く現はれて、普通病慢性病等まんせいびやウ は多く現はれず。明治に至りて肺病はいびヤウ 甚だ多く現はるゝに至れり。窒扶斯ちふす、虎列刺これち、百斯篤べすと、赤痢やくびヤウ は疫病として



## □ 劍崎沖の風。

記行文である。數ある中から此一篇を抜く。

甲寅の四月八日。今日は亡妻の忌日なり。身心保養の爲に出たるかりそめの旅のやどりなれば、掃墓供花の事にも及ばず、壽量品を觀じて、心香を焼くに、魂髻髻として來り、ありし世のおもかげも眼の前に立つことす。寺島の里、大森の山、家にも墓にも遠く隔りて、昨夜の雨の後の雲猶黒く浪猶白める此海邊に、孤居の曾の中の紛るかた無ければなるべし。

昨夜頼み置きたる船頭來り、昨夜の雨風の名残りの浪、猶うねるべけれ

ども、之を病み玉はずばまるるべしといふに、何程の事のあるべきやと、八時半宿を出で、油壺へむかふ。歌舞島、二町谷の景色、富士、箱根、天城の山々の遠望、昨日も一昨日も見たるなれど、猶飽かず眺めやる。油壺はまことに其の名のごとく、一水斗入して深泉をなすところ、兩岸鉗挾して長渠を形づくる。船のやうやく進むに隨ひて波無く瀾無く、水は油の如く、樹翠草綠、あざやかに影を涵して、舷をさへ染めんとするばかりなり。三浦氏の古の城は左の方の高處にありしよし。人去つて花は春に開き、城廢して草は雨に萌ゆ。相模風土記を引出して昔を偲ばむも却つておろかなるべし。左岸の水に近き處に大學の臨海實驗所あり。就て觀るに、少々の標本と漁船漁具の模型、および實物あるのみ。熊吉といふ男をも見たり。

海産動物學の研究をなすもの、此の熊吉の力を須つこと少なからぬをもて、聊名ある男なり。何事か忙しげに立働けるをもて語らずして已みぬ。歳などもおもひのほか若し。東京淺草の水族館に活魚の供給をなせしも此の男なりと聞きぬ。噂なれば眞偽は知らず。我はたゞ鱸魚の上に此の男の智識を試みんとおもひしのみなるが、其の儘に過ぎぬ。標本の中、環蟲類には、吾が眼の未だ曾て見ざりしものももとより多かりしが、吾がいさゝか意を留めつるものゝ見えぬも少からざりき。ピツカードイクの釣魚書に見えたるラダ、(ごかいのラダにあらぬ)攝津の竹藏虫の如きは、此のあたりには無き歟。學生等の餘念も無く研究室にて研究に耽り居れるを羨ましくも好もしくも見つゝ、實驗所を出で、歸る。なぐら猶高く、船甚しく揺る。(餘

波をなぐらといふ。なごろ、なごりに同じ、古き言葉なり。)

午餐をなせる中、障子の玻璃越に、風のやうやく南になりて、天のやうやく明るくなり行くを見、一昨日漁夫に聞きし房州渡の事をおもひ油壺へ通ひし男の猶在りしを呼びて、遊意の動けるまゝに此の事を問ふに、げ風も宜しかるべきやうなり、たゞし渡しわたの海の事なれば、一人にては力及ばぬ事もあるべし、今一人かたらひて御伴申さんとて去る。三崎に在りしも既に四日なり、八丈島を便宜よくば見て置かんと、心待ちに待ちし船は來らず、今は二十年餘りも見ぬ房州の浦めぐりしてなりと歸らんと、勘定を命じ、諸拂を済ますにおもひのほかれんに廉なり。三崎より房州加地山へ海上五里、風よく日和好ければ、幾時間をも費さずして到るべし。風は聊乏

き八景原などを見、右に涯無き南海を受けて、眞東に走る。安房上總の山々、神野山は左にゆるく靡き、鋸山は前に巍々として立つ。鋸山の右に雙峰馬耳の如きは二子山といふ。(雙峰の山を二上山二子山など呼ぶは吾が邦のならひ也。とみ山といふも亦雙峰の山をいふか。考ふべし。)八犬傳の富山のまことの稱は「とみさん」にして、蓋此二子山なりと漁夫の教へ呉れたるもの歟。非歟。船はおよそ二子山をさして走るに、風急に烈しくなりまさりて、彌帆の檣危く折れんとするに至る。願ひたる風もかくては些多過ぐなんどいふ間に、沖鳴いよく烈しく、風の音もたゞならず響く。帆の小きもの一ツにして走るに船の行くこと飛ぶが如く、小山のやうなる浪を切りて、雨霰と散る飛沫を浴びながら進む。其の快さいふばかりなし。さ

しかれども、二挺櫓なれば漕ぎても渡るべきに、日は美はしく射し、時候は暖くなりたり、船上に柑を劈き、麥酒を酌まば、長風に髪を梳らせ、雲天に眼を放つ樂もひとしほならむと、菓物麥酒など載す可く用意す。頓て船頭來り、船よそひ成り、相棒も出來たりといふ。乃ち濱に下り立てば、今一人の男は一昨日の舟遊びの時の船頭なり。相見て一笑し、いざとて舟に上るに、宿の女房婢僕など口々に別を叙し濱に立ち見送る。わづかに三四日の馴染なれどやさしきは人の情にして、又おのづから渡世の習なり。風の力足らねば船子櫓を押す。二挺櫓のえいゝ聲、勇ましからぬにもあらず。やがて海南、花暮、中崎、入舟、日の出を過ぎ、城ヶ島の遊ヶ崎、老松の海にさし出したるがありしといふ岬を過ぐれば、左に三崎の地つゞ

れど舟小にして風烈しく濤大なれば、麥酒など飲みてあるべくも無く、波浪の洶湧やうやく募りては、六人箱、帆櫃など動き出して、なかなか安坐すべくもあらず、船梁を力にして辛くも身の躍るを防ぐほどなれば、舵ひく男の眼の中も鋭く、物言も荒くなりて、帆を下げよ、帆脚を詰めよ、延ばせよといふも、叱咤するごとく聞ゆるに至りぬ。劍が崎の燈臺を後にするになん／＼として、巨浪山の如く、扁舟葉の如く、簸盪ほと／＼堪ふる能はざるに近し。とも艚わき艚を左右に張りて、鳥の翼をひろげしやうになし、其の腕木をや／＼高く柱に縛して又字をなさしめ、船傾けば櫓端水を拍つて其の抵抗によりて覆へるを防ぐべくしつらひなせるに、櫓端水を拍つこと絶間なく、時に或は山なす浪を切りて撓み軋るも見る眼もの憂く危

じ。風は南より來り、船は東へ走る。さなきだに風強くては難儀なるべきに、此の風いと暴びて、蓬々と吹く中に稜々としていら酷き時あること、警へば山に巖あり肉に骨あるが如くなれば、陣々として到り、忽々として下すごとに、人の膽を破り心を寒うするに足るものあり。颯風といふはこれなるべしと問ふに、船頭答へて、これはしぐれ風と申すなり。夕立の雨、雷雨、時雨のおとす時などにかゝる風吹けば、かゝる名あり。今こゝは南の風吹けども、こゝより幾程もあらぬ觀音崎より北は、猶北の風吹き居るなるべし、北の空の雲を見るに北の風に靡けるさま無く、たゞもやもやとして黒く凄し。おもふに此處は南風、彼方は北風、此處は暖く、彼方は寒く、此處は何も降らず、彼方は何か降り居るなるべく、風も唯一方の強き

風にはあらで戦ひ争ひつゝある風なれば、時ありて突貫する勇兵の如くに、おそろしき威を揮ふことあるなりといふ。英語にスコールといふは時雨風といふべきにや。かゝる事をおもふ中風ますく募りて浪いよく狂ひ、船の高くあがる時は馬に騎りて峰を行くが如く、低くさがる時は谷に居て士に坐するが如く、鋸山二子山も浪に隠れて見えなくなる事、おもへば恐ろしききはみ也。濤の高さは二丈にも餘るなるべし。其の頂に雲の花を簇がらせ、銀の簪をかざして、弓なりの曲線を書きつゝおそひかゝる凄しさ。おもしろしと云はんには、氣ちがひじみたらん。然れど大和根の風雨に夜泊したるも既に二度也。天草、玄海、羽越の海の風にもあひたれど、予多く風浪をおそれねば、壯快におもふかたも無きにあらず。たゞ船子も船頭

も各其のつとめに心苦めばにや、漸く顔色よろしからずなりて、言葉掛けらるゝを欲せず。船頭は船子を罵りて、帆脚を引けよ延べよと差圖し、おのれは舵を取りてしきりに之を左右す。浪を觀て、帆と舵とをもて調子を取る事、たとへば自轉車に乗るもの、把手と錠子とにて調子を取るが如くすと見え、風濤いよく募るに、舵ひく男の顔つきいよく眞面目に險しくなり行く。其の中に舵をひきそこねしにや、帆をあやつりそこねしにや、巨濤たちまち澎然として船に入り、頭より盡く濡れひたり終りぬ。飛沫は既に浴びに浴びたれど、猶巨濤は浴びはせざりしが、こゝに至つて流石に驚きあされ、阿伽をかき出しなす。およそ一石近き水のたゞ一浪に入りしなるべく、船子の阿伽かく手さへたゆげになりたり。洋服なれば

こそ予は猶堪へよけれ、船頭は濡鼠ぬねずみの如くなりて、いよ／＼げほ險しき顔す。船子はやゝ老いたれば、精力せいりよくはやく竭つき、怖畏ふゐしきりに高まりてや、氣拔きぬけ顔になりて、耳も疎うとく、心もまはらずなり、船頭の命めい令れいを取違とりちがへ聞洩きこしなとし、船頭をして怒號どごうし憤嗟ふんさせせしむること多くなりぬ。やがてまた風は一段の猛まうを加へぬ。其の吹きかた恰も鞭むちをもて物を打うつがごとく、一ト吹吹かるゝ時は、一ト鞭むち鞭むちうたるゝのおもひあり。牽ひけといふ帆を牽ひかざりし船子のあやまちに、船の走る力足らずして、舵かち從したがつてきかず、あつといふ間もあらず巨浪どつと落來おちきたりて、船ほとんど覆くつがへらんとし、冠かぶり居し片木帽まぼうの上より横さまに潮の瀧たきを浴あびて、耳も目も吾が物ならずなりし刹那せつなは、船のくつがへりしか、身の舟外ふねがへに抛なげ出いだされしかと思ひしが、滿身まんしん淋漓りんり

として潮氷の鬢びんにも肘しなにも滴したる我を見し次の刹那せつなは、先づ好かりしと思ふと同時に、危険きけんの甚だ大なるを感じ、眉毛まゆげより鼻端はなばしより潮の滴したるをば拭ぬぐひもあへず舵柄かじを取る船頭の蒼然そうぜんたる面を見ては又今さうに安からずおぼえぬ。船頭は終に口を啓ひらきていふやう、安房の地へは猶三里弱あり、強いて船ふねを行らんには、横浪横風なれば、危険きけん測はかり難し、今は風下へ走りぬけて生命せいめいを助かるのほかあるべからずといふ。今の如き濤なみをつゞけて受けんには、船小さければ堪たふべくもあらず、と息もたえ／＼に喘あせぎながら阿伽汲あかくみ出す船子の言ふもいつはりならず。強しいて安房へ行くべき要のあるならぬはもとよりの事なればさらば浦賀へ走れかし、といふ。折柄伊豆方面はうめんへ向けて走り居りし汽船きせんも、また風浪に堪へやらで下浦へと逃にげ入る。我が

船は地方に寄り、浦賀へところどころに、横浪横風あらねば、前ほどは危  
 からねど、猶浪の高く風の荒さに、膽の寒ゆること二三度のみならず。春  
 の末とはいひながら海上のことなれば、さらぬだに膚冷ゆるを、まして満  
 身に潮を浴びて、シャツもツボン下もぐつしよりとなり、身動きする度々  
 心地悪き冷さをおぼゆるに、五臓やうやく寒さに縮みて骨の髓より弱々し  
 き思の湧く。恐怖に胸の顫ふにはあらねど、寒に齒さへ合はざらんとし、  
 又身の温の衰ふるに随ひて、心も強さを失はんとす。心身の離れぬものな  
 ることは今知るにあらねど氣の張と血の熱との密に接けるものなることを  
 つく／＼悟りぬ。熱き茶の一碗、烈しき酒の一杯も飲ま欲しけれど、叶は  
 ぬ願なれば是非に及ばず、たゞ丹田に力を満て、寒濕と風濤とに堪ふるの

みなり。船は風を眞體にすればや、狂ひ止みたれど、風は空に自由に暴れ  
 て猶猛り吹き、昨日なぐらに今の立浪の加はりて、船の揺り上げ揺り下げら  
 るゝまに／＼身を漂はし上げ漂はし下げらるゝこと、篠の梢葉に宿れる  
 蝸牛の嵐に翻られて、空に嫋々と浮沈するが如し。船だに今少し大きくば  
 事も無からむを、船小さくて浪高ければ、生命もほと／＼頼まれざらんと  
 す。船の濤の谷へ墜ちたる時は、船に我が橋より高き濤の峰を見、濤の峰  
 へ乗りたる時は前に我が船を呑まんとする濤の谷を望む。彼は青山なるべ  
 く、此は黄壙たるべく、人間到る處骨を瘞むるに堪へたり。由無き思立し  
 てこゝに至れること、是非なし。若し、死して冥土に到らばそれも可、か  
 しこにも妻あり、兒あり、生きて現世にあらば、それも可、こゝにも妻あ

り兒あり、たゞ因縁の牽くに任せ、業報の示すを甘なはんと、心ひそかに自ら戯れて風波の中に坐するに、思做はをかきさものなり、身は動いて意は動かず、鞦韆に乗りて上下するが如き心地するのみ、船頭舟子の蒼く黒める憂怖の面の却て惘然に見ゆ。風に鞭うたるゝこと猶幾度、濤に簸らるゝこと又幾度、風巖しくては、帆の裾の桁を鞍馬の竹切の術にて截れるが如くに帆脚の綱のところよりつツと截られ、濤激しくては、航響きて板子跳り物躍ね上らんとす。かくて走ること良久しく、風やうやく少し衰へかゝる時、辛くも浦賀の港に入れば、港の中は浪平かに風も殺げて、たゞ日の色の怪しく赭く照れるのみぞよからぬ天のさまを見せたる。船頭舟子もほつと息つき、五音の調子も纒かに整ひつゝ顔色平常になりたる額に手し

て、先づ生命拾ひしたる嬉しさ嬉しさ、横浪横風の時は言ふに及ばず、追浪追風になりて走れる時にも、船の餘りに小さければ助かり遂げ得べきや如何にと怖しかりし、と云ひ、かく浪も風もおだやかなるところに入り來れば、今のさきまでの困苦は、たゞ是悪き夢に魔はれたりしが如くおもはると云ふ。實に人事は過ぎ了れば都て夢の如く、七情擾々として空しき臼を擣く、醒め來れば憂と悲と皆笑ふ可く、簾外に山青くして靜にして、舊に依る、をかきさ浮世の相なり。若し夫神を頼み道に依りて風浪激しき世にも安穩を楽しむは、たとへば良き港の中に擁かれて小舟の安きを得るが如しと、先刻の艱難に現時の和易を比べてはつくづくと思ひ染みぬ。何も可し、彼も可し、叱咤も澁面も今は濟みたり、寒冷が不妙けれど麥酒の



杯をなりと舉げて互に祝さん、と、板子下より麥酒を取り出して、人各の笑顔を欣悦の酒の香に吹かせぬ。

現世の縁や猶盡きざりけむ、浦賀の町の土に吾が足を上せて歩みぬ。靴の帆櫃の中に藏め置きたれど、潮水に甚く濡れて縮まりたるを、靴下の同じく潮に濡れたるを強ひて穿ちたれば、足は踏み立つ可くも無く痛し。帽子は薄縁吳座の下に置きたるを、風波の騒ぎに何時かは知らず舟師の踏み潰したれば、引出して押直したるに破れ損じたり。其の靴を穿ち、其の帽を冠りたる、人の眼こそはいざ知らぬ、我が心の中は堪えがたく可笑しきを忍びて、横須賀行の自動車を索むるに、運悪くして今し發したる後なり。已むを得ず人力車を僦ひて横須賀へと走らするに、車上の辛さ言ふべくも

あらず。身内漸く冷えて、北風(果して船頭の言の如し)の厳しきに胴より戦慄の湧くを防ぐべくも無ければ、唸、唸、唸と、唸字をのみ持して、やうやく横須賀に着き、幸に汽車を得て新橋に運ばれぬ。電燈煌燐、士女絡繹、都は春の夜の華やかなるに先づ身を支ふるばかりの食事して、家に歸れば既夜は更けつ、狗も驚き婢も訝しみて、立迎へし妻の眼の中にも駭異の光は動きたり。此の日東京も天常ならずして、稀有の雹降りて人皆驚きしとぞ。濡れる洋服を脱ぎて、はじめて彼の世への境より此の世へは還りぬ。世縁猶未だ盡きざるなるべし。

### 洗心録の社會教育

此書に現はれてゐる幸田露伴博士は、全然老熟した常識の圓滿なる思想及び人格を有する温厚の紳士であるといへば、それで盡る。

其博士が、社會教育といふ主眼の下に、折に觸れ、時に随つての感想が此書の大部分を成してゐる。

一步も譲らぬ公正な立場から此書を見れば、博士の著『努力論』に於て、たゞ『働け、働け』と訓へて居られるのと同じ態度を以て、たゞ穩やかに、普通のことを普通に、何の皮肉もなく、又大した諷刺も無く、人間一個々々の内心に喰ひ入る程の熱心もなく、丁度高い教壇に立つて、社會を一樣に瞰下して、而してポールドに種々雑多な社會の様式、現象を描いて、『社會といふものはかういふものだ。それ故かうしなければならぬ。』といふやう

に説かれてゐる。

社會にとつては、その穩かな、極く平易な教訓が、尋常小學の兒童のやうにまことに感謝すべきことであるかも知れない。否手をとつてまで導かうとする博士の温情に對してはどこまでも感謝せねばならない。

然し乍ら、博士の論悉く、餘りに抽象的に見えるのは遺憾である。たとへば『働け！』と訓へられてはあるが、『何のために！』との根本問題は遂に説かれてゐない。が、かういふ態度は、依然、所謂社會教育といふことは最も、必要な、容易な態度であるからであらうと信ずる。

次に、この感想の隨處に散見する博士の思想、主義は、全く對他主義乃

至他愛主義であるのは注意すべき事である。

所謂社會教育を爲すがためには、第一義として、エゴイストであつてはいけない、人の爲にしなければならぬ——と説かれたのであらう。何の考慮もなしに、社會教育其のものゝ爲に、他愛主義乃至對他主義が引合に出されたやうに思はれる。又博士自身も、社會に向つて、所謂社會教育のために力説して居られる中に知らず／＼に、さういふ主義になつたのかも知れない。

従つて、これは深く答へべき問題ではない。從來の社會教育は、個人主義とは決して兩立しなかつたのだから。

私は今更茲に個人主義を説くことはしない。しかしながら、彼の支那へ

行つたバーナード・ライチ氏は、「日本が今、最も要するものは個人主義である！」といつたさうである。最も考ふべき言であることを忘れてはいけない。

吾々は一齊に、先づ博士の勞を感謝して後現代の社會はもつて自覺してゐることを、博士に示さなければならぬ。然る後に、博士に向つて、もつと根本的な、科學的な、吾々各自の生活に痛々しく觸れるやうな教訓を要求すべきである。

感想の他は、主に日本の古代文學、徳川文學の研究で以て充され、其他、短文、記行文等凡てのものは、私の喋々を待つまでも無く熟讀して、此處

にこそ博士の眞の面影おもかげを窺うかがふことが出来る。

洗心會心錄終

賣捌所

東京市神田區駿河臺  
振替東京一二三三六



電話本局  
四八五五

(錄心洗)

製複許不

錢五拾貳金價定

大正四年四月十七日印刷  
大正四年四月廿二日發行

著者 稻毛 詛風  
發行者 名著評論社  
右代表者 榎村 象介  
印刷者 佐久間 衡治

名著梗概及評論  
附奧論

東京市神田區小川町四十一番地  
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

株式會社秀英印刷

# 名著梗概及評論

## 論評及梗概著名

- 第一編 三宅雪嶺氏の
- 第二編 島崎藤村氏の
- 第三編 高山樗牛氏の
- 第四編 トルストイ伯の
- 第五編 國木田獨歩氏の
- 第六編 ベーネット夫人の
- 第七編 尾崎紅葉氏の
- 第八編 大西博士の
- 第九編 櫻井大尉の

- 世の中
- 藤村詩集
- 樗牛全集から
- 戦争と平和
- 獨歩集
- 小公子
- 多情多恨
- 西洋哲學史
- 肉彈

- 山路 愛山氏著
- 川路 柳虹氏著
- 三井 甲之氏著
- 相馬 御風氏著
- 福永 渙氏著
- 平山 訓子氏著
- 中村 星湖氏著
- 三木 露風氏著
- 福永 渙氏著

袖珍上製頗美本  
紙數各冊二百頁  
定價各冊二十五錢  
送料各冊金四錢

## 論評及梗概著名

- 第十編 寛博博士の
- 第十一編 和泉式部の
- 第十二編 綱島梁川氏の
- 第十三編 ツルゲネーフの
- 第十四編 夏目漱石氏の
- 第十五編 ダンマントツイオの
- 第十六編 新渡戸博士の
- 第十七編 和田埴博士の
- 第十八編 夏目漱石氏の
- 第十九編 正岡子規氏の
- 第二十編 夏目漱石氏の
- 第二十一編 柳川春葉氏の

- 古神道大義
- 和泉式部歌集
- 病問
- 浮草
- 鶉籠
- 死の勝利
- 修養
- 兎糞録
- 吾輩は猫である
- 子規隨筆
- 虞美人草
- 生さぬなか

- 岩野 泡鳴氏著
- 與謝野 晶子氏著
- 生方 敏郎氏著
- 本間 久雄氏著
- 川路 柳虹氏著
- 西宮 藤朝氏著
- 西川 光次郎氏著
- 芦川 忠雄氏著
- 生方 敏郎氏著
- 坂元 雪鳥氏著
- 西宮 藤朝氏著
- 永代美知代氏著

論評及概梗著名

第廿二編 ヴェーダの  
 第廿三編 井原西鶴翁の  
 第廿四編 沙翁の  
 第廿五編 徳富蘆花氏の  
 續刊 徳富蘆花氏の  
 續刊 頼山陽の  
 續刊 茅原華山氏の  
 續刊 徳富猪一郎氏の  
 續刊 福澤翁の  
 續刊 相馬御風氏の  
 續刊 尾崎紅葉氏の  
 續刊 モンテッリの

フアウスト  
 西鶴傑作集  
 ハムレット  
 黒い眼と茶色の目  
 みゝずのたはごと  
 外史論纂  
 人間生活論  
 時務一家言  
 福翁百活  
 毒薬の壺  
 金色夜叉  
 教育學

齋木仙醉氏著  
 眞山青果氏著  
 木村鷹太郎氏著  
 生方敏郎氏著  
 生田長江氏著  
 大町桂月氏著  
 安成貞雄氏著  
 山路愛山氏著  
 田中王堂氏著  
 大月隆伏氏著  
 徳田秋江氏著  
 伊藤長七氏著

278  
2/6



終

KEI ■  
BUN  
KWAN